

月下美人の咲く夜

菊野 啓

面接室の外に置かれた長椅子には、タカシと同じく求職中の男女が、ざっと二十人は並んでいる。秋の気配が微塵も見えない九月の残暑は、冷房の届かない廊下を熱気のるつぼと化していた。

汗を滴らせながら窮屈に肩を寄せ合って、順番をひたすら待つ。暑さに耐えきれない一人の青年は、不機嫌そうに携帯電話をいじっている。やがて、捨てぜりふに近い独り言を吐き捨てたかと思うと、くるりとときびすを返して出て行ってしまった。真新しいリクルートスーツを翻し、減っていない革靴の音を床のリノリウムに残して振り返りもしない。気持ちは理解できるが、この程度で退散していたのでは、金融危機とやらの余波をもろに被った今年の就職難にはとうてい太刀打ちできない。

じつとりと汗ばむシャツの背中を浮かせながら、タカシは面接を待つ顔ぶれを観察した。どれも冴えない表情を仮面のように張り付かせて、憂鬱そうな視線を虚空に彷徨わせている。

半年以上前から、二十社を超える入社試験にことごとく失敗してきた。糊口をしのぐための職を見つけることがどんなに困難か、危機感の薄いタカシの身にも否応なく染みてきた。根拠のない樂觀に裏打ちされた諦観で乗り切ってきた。今日もわずか一名の募集に群がる求職者に混ざり、まったく周囲の不快さに埋没していない。落ち着いた気持ちで、面接の順番を待ち続けている。しかし、この会社で最後にすると心に決めていた。

無機質なドアの向こうから、天井のインタフォンに呼び出しの音が落ちた。タカシは何の気負いもなくすっと立ち上がり、面接の作法通りに軽くノックして、誰かの汗で湿ったノブを押した。

「本日は当社の入社試験にご応募いただきありがとうございます」事務用機の向こうから二十台後半くらいの面接担当者が、よく透き通る声で言った。

きれいにカッとした黒い髪をセンス良く左右に分け、シルエットのすっきりした濃紺のスーツを着ている。幅の狭いスチール机の下から、組んだ長い足が伸び出ている。先の尖った黒い革靴の先が、何かを挑発するように目の前で揺れている。促されて椅子に腰掛けた。

「さっそく面接に入らせていただきます」

隣に座っている女性職員の方をちらりと一瞥してから、面接官はおもむろに口を開く。若いが新規の求人を担当する人物だけあって、どこかしら威厳を漂わせている。丁寧な物腰だが、唇の端には薄い冷酷な笑いが張り付いていた。

「当社は農業法人として、全国で農地展開しておりますが、あなたは農業のどのようなところに興味を抱かれましたか？」

直截な質問がまずやってきた。

「太陽の下で体を動かす気持ちよさです」

真っ直ぐに相手の目を見て、タカシは答えた。

「農業は天気の良い春先の一日だけではありませんよ」

伶俐な光をたたえた視線を向けてくる。

「雨の日や猛暑や酷寒の日もある。若年者の離職率が非常に高い職業が農業なのです。ご存じでしたか？」

「仕事とはそういうものだど覚悟しています。四季が移ろう中、土の上で体を動かす快感は、日々の辛い作業に耐えうる糧となり、生き甲斐にもなるのではと期待しています」

若い男は、ふうんという顔をして、傍らでメモをとる眼鏡の女性事務員に再び視線をやった。白いブラウスに黒のタイトスカートの女は、顔を上げることもなく手元に集中している。後ろにひつつめた黒い髪の毛と金縁眼鏡が、女の年齢をわかりにくくしていた。

「農業の経験はありますか？」

「実家は農家でした。今でも祖父母が細々と小さな畑を耕しています」

「ほう、幼少の頃から手伝いをしていたと？」

面接官が前髪を撫でつけながら顎を動かした。

「ええ、乳牛を二十頭ほど飼っていたこともありました。御社で展開されている酪農にも多大な興味を抱いています」

タカシは小さな農家の一人息子として育った。狭い田畑にしがみつきながら農夫として送る一生が、今は亡い父や母がそうしてきたように、どのようなものなのかを知っていた。

学校が終わった時間やほとんどの日曜日は、農作業の手伝いをさせられた。友達と遊びまわりたい盛りであったが、山間部の小さな学校の級友たちの多くも同じ境遇であった。作業の合間にできた奇跡的な休暇となると、多くの子供が寄り集まって、運動会さながらの遊びを野原で繰り広げたものだ。

それに反発し、別の道に進もうとしたが、自分にできそうなこと、向いていることすら簡単にはみつからなかった。時代は変わり、農業のあり方も大きく姿を変えようとしていた。こんな会社が休耕田を買い漁り、大きな規模の作付けをはじめた。近代的な工場ともい

える会社が行う農業に、タカシは深い興味を覚えていた。

「大学で経済学を専攻されたのはなぜ？」

「税理士になりたいというのが入学時の希望でしたが、やってみて自分には不向きであることがわかりました」

女事務員はあいかわらさうつむいたまま、筆記を続けている。何を記録しているのだろうか、覗いてみたい衝動に駆られる。視線を気取られないように盗み見る。薄いブラウスの下の両肩は丸みを帯び、ボタンを二つ外している襟ぐりからは、白く滑らかな首筋と豊かな胸の一部が覗いていた。最初の印象よりも、ずっと若いことに気付いた。

「農業の明と暗に子供の頃から触れてきました。農地を工場と捉える御社の考えのもとで、新しい時代の農業を学んでみたいと思って

います」
語尾をはっきりと、力を込めて答えた。相手は薄い唇を動かして何かをさらに言いたそうにしたが、意味のはかれない微笑ですべてを打ち切った。

タカシは一礼をして椅子を立った。そのとき、はじめて白いブラウスの女性が、顔を上げ視線が一瞬交錯した。金縁眼鏡の奥の瞳の奥深いところで、蠟燭の炎のような赤い光が瞬くのを見た。

なぜかタカシは心の奥底を見透かされた気がして、落ち着かない気分になった。農業に対してというより農夫という存在に対して、タカシは侮蔑を含む嫌悪を抱いている。年老いた祖父母を死ぬまで辛い農作業にしがみつかせているものは、いったい何だろうと思う。年金で細々と食いつなぐこともできるはずだ。持病のある全身を、霜の降りた凍てつく畑に這いつくばらせる動機は何なのか、タカシは自分が農夫になって解明したいと思う。

ネクタイを弛め、愛車を停めた駐輪場まで歩いた。さっきの女事務員のことを考えていた。誰が見ても、美人といってもいい顔だった。しかし、整いすぎた美貌の裏に、見る者の不埒な妄想を萎縮させる、どこか底知れない冷たさを秘めていた。

タカシはネクタイを首から外してジャケットのポケットに突っ込み、青いCB750Fのエンジンをかけた。うずくまった虎みたいに、マフラーから低く抑えた破裂音が吐き出される。獐猛な咆哮への欲求を高回転型の内燃機関が訴えはじめた。

太陽はいまだ衰えを見せない。タカシはうっとうしい面接場の空気を断ち切るように、大きく息を吸い込み、バイクにまたがった。おもむろに一二度空ぶかししたあと、なにかに弾かれたように勢いよく走り出した。

山田輪業の狭い店の中では、居場所を見つけて座ることが至難の業だった。タカシは店の入り口に停めたCBのシートにもたれたまま、奥の整備スペースで作業を行うサトウと言葉を交わしていた。サトウのメカニック姿も、そこそこ板に付いてきた感じだ。大手の電池製造会社で派遣社員だった彼が、突然の解雇によって路頭に迷い、山田輪業に転がり込んで来たからにはや一年がたとうとしている。彼の給料はあいかわらず「ねぐら」と「メシ」だった。最近になって政府の緊急雇用対策とやらで援助を受け、ホームヘルパーの資格を取ろうとしている。実習のために近くの介護施設へ通っているのだという。

「入社試験の帰りかい？」

タカシのスーツ姿に気付き、近視の眼をしかめて見せた。オイルで黒くなった顔の真ん中で、少し突き出た白い歯がそこだけ若々しく清潔そうに輝いた。

「そのとおりです」

「農業がやりたいんだって？」

「企業経営による大規模農法というのを、この眼で見たいんです」

「あの最近よくテレビにも出てくる、メサイヤとかいう会社だろうか？この不景気で一躍元気になって、全国的に求人しまくってるらしいな。ちょっと胡散臭い気もするけど」

サトウは大学の二年後輩であるタカシのことを心配してくれる。

「胡散臭くない会社なんて、このご時世どこにもないでしょう。いつ潰れるか、首を切られるかわかったもんじゃやない」

「まったく」

俺の姿を見ると、サトウは見当違いに胸をはって見せた。

「行き着くところは、爺さん婆さんの下の世話さ。この国にはもうそれ以外に仕事が残っていない。自分で自分の古くなった手足を食って生きながらえていくようなもんだ」

サトウは自嘲的に笑った。何に対する笑いかわからなかった。

「就職活動はどちらにしても、これでおしまいにするつもりです。決まらなかつたら、バイトでもしながら日本中を放浪する旅にでも出ようかと」

本気でタカシは、バイクに寝袋とポストンバッグひとつ積んで、あてのない旅に出ようかと考えている。金がなくなったらどこかでアルバイトでも探し、食いつなぎながらバイクで行けるところまでいくのだ。それを押しとどめるものは、何ひとつない。

「いいな、それ。俺もそうすれば良かった」
羨ましそうに言った。

「行くんならとにかく北上して、北海道に渡るといいよ。食い物にありつくくらのバイトならすぐみつかる。夏は牧場が多いし、畑の広さもケタが違う。そこら中に漁港もある。冬は民宿で雪かき、どこも人手不足だし。なんならどこか紹介できるかもしれない」
彼が学生時代に、バイク旅を繰り返していたことを知っている。

「一緒に行きますか？」

「いや、行かない。俺はもう少し、自分の根っこみたいなものがどこにあるのか、どこを探せばみつかれるのか、あがいてみたいんだ。派遣切りとやらでいきなり首を切られて、心底頭にきたんだよ。そんな契約だとは知らず、軽く考えてサインした自分が悪いんだけどね。仕事って、食っていくためにするものだろ？でも人生の時間の大部分をそれに費やすわけだ。少なくとも、やり続けていて苦痛じゃないものを選びたいと思わないか？それから、人を騙したり嵌めたりするのもイヤだ。贅沢いえないのはわかってるけどさ」

「好きなことを仕事にできれば、どんなにか幸せでしょうね」

天職と思われる仕事に従事して、一生を送れる人間がどれほどの数いることだろう。やりたいことを探せ、夢を追うのをあきらめるな、しょっちゅう聞く言葉だが、そんなものが簡単にみつければ世話は無いと思う。

「いや、それもちょっとちがうと思うね。ここ一年ばかり、バイクいじりに没頭してみて、ほんとうに好きなことを仕事にしてみようと、かえって窮屈になっちゃうような気がする。何にだって向き不向きってものがあるだろ。好きなことが、自分に向いていることだとは限らない」

「バイクは好きだけど、バイクいじりは向いてない？」

「うん、つらい」

二人は同時にからからと笑った。店主のヤマダが、怪訝そうにこちらを見た。店の奥の小さなテーブルで、常連客で歯科医のコンドウと、なにやら鳩首を寄せて話し込んでいる。

「サトウ、そいつは午後には納車だぞ。もたもたやってんじゃねえ」
ヤマダが尖った声で叫んだ。

「必ず間に合わせますって」

サトウはスパナを握り直し、バイクの裏側に潜った。オイルでぬるぬるする床の上には、夥しい数のナットやワッシャーが散乱している。たしかに、バイク好きがバイク屋に向いているとは限らない。午後からこのバイクを引き取りに来る客が、少し気の毒な気がした。

あいかわらず店先でゆったりしていると、ヤマダがのそりと出てきてタカシに話があると云った。

「コンドウ先生と、信州にツーリングに行っただけ。どうせ暇だろ？旅費は先生が出してくださるそうだ」

「バイクですか？」

「もちろん。べつにバイクでなくともいいんだが、先生がどうしてもバイクで行きたいそうだ。目的はご自身から聞けるだろう」

店の奥に目をやると、土気色の顔をしたコンドウが、力無く片手を上げた。久しぶりに顔を合わす彼は、別人のようにしぼんでいる。

「何をすればいいんですか？」

「先生は体調があまりすぐれない。でも、急ぎの用があつてどうしても行かなくちゃならない。いろいろとサポートしてあげてほしい」

「二台で行くんですか？」

「いや、もう一人頼りになるのをつけるよ」

すでにアンドレが同行することになっているという。身長百九十センチ体重百キロを超す大男のアフロヘアを思い出した。

「楽しい旅になりそうだろ？」

ヤマダがにやにやと笑っている。

「頼んだぞ。とにかく無事に行つてくるんだ。詳しい話は道中、先生から聞け」

珍しく握手を求めてきた。差し出された右手を、がっしりと握り返した。就職先もみつからないが、焦る必要はない。いまはただ自分の人生の行く先をじっくり見定めればいい。時間はたっぷりとある。

「よろしくたのむよ」

薄暗い店の奥に、昼のフクロウのようににはまりこんで、眼だけを黄色く光らせたコンドウが弱々しい声で言った。

三

奇妙なツーリングの同行を頼まれたその夜、タカシが下宿に帰つてささやかな夕食の支度をしていると、携帯電話がメールの着信を告げた。アカネからだだった。明日仕事が終わつてから、ぜひ会って話したいことがあるという。

暇を持ってあます大学生の彼としては、即座にOKのメールを返信した。赤いニンジャ250Rに、赤い革ジャケットで乗る彼女の姿をまばゆく思い返した。形のよい胸がロケットのように突き出している。彼女は郊外の丘の上に立つ、巨大な老人介護施設の職員だった。タカシより二つ三つ年が上だったはずだ。

翌日指定された喫茶店に向くと、彼女はすでに来ていて、取りだした手帳を眺めていた。タカシの姿に気付くと、満面の笑みを浮かべて、こつちよ、と手招きした。美人というわけではないが、他人を安心させるあたたかさを持っている。彼女の中にある熱源は、何のてらいもなく素直に相対する人間を照らす。それが職業が鍛えられて身に付いたものなのか、あるいは生まれつきの資質なのか、

タカシには知りようもなかった。

「ひさしぶり。バイクには乗ってる？」

「うん、快調にね。そっちは？」

「忙しくて全然。愛車がかわいそうで」

やる気のなさそうなウェイターが、待ち人が来たのにやっと気付いて注文を取りに来た。

「お腹すいてるんじゃない？わたしも軽く夕食にするから、いっしょにどう？今日はわたしが奢るから、よかつたら何でもどうぞ」

「ありがとう。じゃあ、遠慮なく」

タカシはメニューの中から、店長推薦のふわふわオムライスセットを、アカネはアンチヨビとトマトのパスタを単品で注文した。

運ばれてきた料理をつつきながら、アカネは唐突に本題に入った。

「タカシ君はこれまでに、うんと年の離れた人を好きになったことはあるかしら？」

「残念ながらない」

口に入れたオムライスが、予想以上に熱くて噎せそうになる。

「それって自分の話？」

「かろうじて飲み下しながら聞いた。」

「誰にも喋らないでくれる？」

「約束する」

スプーンを休めて、アカネの顔を見た。頬がうっすらと羞恥に染まっている。恋をしている女の顔を、まじまじと見つめた。

「わたしは昔からそうなんだけど、同じ年代の男性に魅力を感じることはないの」

「年上ってどのくらい？まさか職場にいないよね」

介護している老人の一人に恋をするアカネの姿を想像してみた。

「それはひどすぎ。だいたい二十歳くらいかなあ。父親の年に近い男性を好きになる」

「ファザコンなわけ？」

深い意味もわからず、浮かんだ言葉を口にした。

「安易な言葉で片付けないでよ。たしかにわたしは父親の愛情というものには縁遠い育ち方をした。それも心の奥底にあるのかもしれない。でも、そんな単純なものじゃない」

「ごめん。君のことは何も知らないんだ」

「もちろん、親密な友達ってわけでもないのに、突然呼び出してこんな打ち明け話をするのも、お門違いだってことくらいわかっている」
アカネが顔をしかめると、それまでふつくと丸みを帯びていた顔が、急に倍も歳をとったようにしわくちゃになった。彼女の奥深くに潜む複雑な感情が、一瞬水面に浮かび出たかに思えた。

「あなた、コンドウ先生とツーリングに行くんでしょ？だからあ

なたに頼むしかないのよ」

「ひょっとして、好きになった相手って」

「そういうこと。コンドウ先生よ」

アカネはアンチョコビのかけらをフォークの先でいじりながら、自身を鼓舞するように言った。見開いた眼の奥で、意志の強そうな光が瞬いている。

「ふうん」

タカシは何に納得するでもなく、深い溜息をついた。

ある異性を好きになった他人が、いろんなアクシデントの前で右往左往するのを眺めるのは、第三者にはとても興味深いものだ。しかし、その一方で、なぜかねじくれた嫉妬を感じてしまう。身を振るほどの恋愛というものを、タカシはいまだにしたことがない。

「それで、頼みとはどういうこと？」

「まずひとつ目は、けっしてムリさせないようにしてほしい。バイクでツーリングできるような体じゃないから」

「病気なの？」

コンドウの土気色の顔を思い出した。

「たぶん癌ね」

いきなり目の前にナイフの切っ先を出された気がした。

「本人ははっきりしたことを誰にも言わないけど、まちがいなく肺かどこかにできた悪性腫瘍だと思う。それも進行したものの可能性が高い」

アカネはしっかりと口調で冷静に話を続けた。

「進行した悪性腫瘍」

意味を忘れた英単語をどうにか思い出そうと考え込む高校生のように、何度もその言葉を口の中で繰り返した。

「どうして君が一緒に行かないの？」

事情もわからず引き受けたツーリングのお供が、おかしな使命を帯び始めている。

「行けない理由がある。まだわたしたちは恋人同士じゃない。わたしはまだ自分の気持ちを打ち明けてもいけない」

「まだ恋人同士じゃない」

思考が絡まり、意味を深く考えることができない。

「でも一方的な片想いってわけでもない」

目を伏せて、はにかみながらアカネが言う。

「いつからか、わたしたちはバイクに乗ることだけじゃなく、一緒に食事したりお酒を飲んだりするようになった。歳は離れていても友人として始まる、ごく自然な男女の付き合いだと思う」

山田輪業のツーリングに、よく参加していた彼女たちの様子を思い出す。

「二人が関係を深める上で、いろいろな障害があった。おもにコンドウ先生の方にだけど」

かつてアカネの口からコンドウが不慮の事故で一人息子を亡くしたこと、その悲しみがもたらす癒しがたい悲しみのせいで、緊密だった夫婦の心が離れてしまったことを聞いた。

「彼の身に突然ふりかかった病が、すべての機会を遅らせてしまった。関係の進行を彼の方から意識的に遠ざけ、思い切りブレーキを踏んでいる。病氣のことを、ヤマダ社長から聞き出すのに手間がかかった」

こそこそと、男二人で深刻な話をしていた姿を思い出した。

「自分の人生に残された時間が、そう多くはないことを知ったとき、彼はやり残したことを片付けに行こうと決心した」

「やり残したこと？」

「そう、ある宗教団体に匿われている奥さんに会いに行くってこと」

「それが信州にある？」

「長野県の山奥に教団の施設があって、ずっとそこから出てこない。監禁されているのか、すっかり洗脳されて自分自身でそうしているのかわからない。その奥さんに、どうしても会って話したいことがあるんだって」

悲しみを少しでも薄めるために、コンドウの妻はある種の新興宗教にはまり、家を出て行くことになった。妻の気持ちを慰め、立ち直らせることのできなかったコンドウは、自責の念に駆られながら、なすすべなくそれを見送った。夫婦が別々の道を歩むことに、納得するしかなかった。そんな話をアカネから聞いていた。

たちの悪い癌細胞が、コンドウの体の中で急速に増殖し、浸潤を続ける様子を想像してみた。自分ならそのような状況のもとで、誰に会って何をしたいと願うだろうか。

「だから私は行かない。というか行けない。横でそれを見ているなんて、とうていできない」

「だから僕にそれを見てきて報告しろと？」

「そういうこと」

アカネは右手の人差し指を立てて見せた。

「それが二つ目のお願い。聞いてくれるわよね」

切実な光を両の眼に宿しながら、アカネは膝を乗り出した。

「コーヒーも頼んでいいかな？」

店長が薦めるだけあって、なかなかココのあるオムライスを平らげてから言った。

「もちろん」

反応の鈍いウェイターを元気な声で呼び寄せ、食後のコーヒーをふたつ注文した。

「最後にもうひとつ、アドバイスを求めるのだけどいいかな？」
「なんなりと」

「今度のツーリングが終わったら、わたしはコンドウ先生にきちんと自分の気持ちを告げようと思う。病気の彼にとって、よけいな負担であることはわかっている。でももう時間が無い。たぶん」

告白してどうするのだろうか。二人の間に明るい未来があると
は思えない。十分始まってもない恋を完結させるために、待ち受ける別離の悲しみや苦痛に耐えようというのか。

「そう決心しているんだらう？」

短い付き合いでも、アカネの一途な性格は理解している。

「うん、彼に遠慮をさせない方法が何かあればいいのだけど」

「それは君の方が、彼に遠慮をしないことだと思う」

やっと運ばれてきたコーヒーは舌を焼くほど熱くて、香ばしいにおいをテーブル中に放った。

「ありがとう」

アカネは慈愛に満ちた顔つきになって言った。

「きつと、無事に帰ってきて。約束よ」

「報告をするときは、またこの店に来る」

「わかった。またオムライスをおごる」

「食後のコーヒーもね」

二人はゆっくりとコーヒーを楽しみながら、オートバイの話をした。旅に出かける用意をしなければと考えながら、タカシはそれが生まれて初めてのロングツーリングであることに、やっと気付いた。

四

九月になっても、夏の勢いはいっこうに衰えを見せなかった。待ち合わせたサービスエリアは、アスファルトの照り返しが、すでに早朝とは思えなかった。ずいぶんはやく到着したかと思っただ、アンドレはすでに戸外に設えられた喫煙コーナーで煙草をふかしていた。カウルを剥ぎ取り、二眼のストリートファイター仕様に改造したGSXR1000が、主人の足元に蹲るドーベルマンのように待機している。

「はやいな」

タカシは汗ばむジャケットの内側から、着込んできたトレーナーを抜き取りながら言った。

「もつと早起きのヤツらがいる」

煙草の煙を分厚い唇から細く吹き出す。アンドレはその紫煙の矢印を後方の地面に向けた。柄は様々だが大きさの似た猫が三匹、誰かの捨てたパンくずを漁っている。

「猫の兄弟か？」

「いや、親子だな。一匹だけいるメスが母親だ」

ひとときわ瘦せこけたグレーの縞模様が、がつがつと顎を動かす二匹を少し離れた位置から見守っていた。自らは貴重な餌を求めようとせず、後ろ足で身の後ろを執拗に搔いている。それが終わると大きく片足を上げ、丁寧に股の間を舐めはじめた。

「猫を見ているのは楽しい」

巨大な体躯にカーリーヘアの頭をのせたアンドレが言う。

「いろいろなことを学ぶことができる」

彼は眼を細め、その顔を柔和に歪めながら言った。

「いろいろなこと？」

「生きていくうえで参考になる。とくに野良猫の生き方にはね」

「野良猫の生き方に学ぶだって？」

「ヤツらは生き延びるために頭を使う。媚びなければならぬ時にはそうする。しかし、いつどんなときも無防備な信頼に身を委ねたりしない」

「突然裏切られ、ひどい目に遭わされた経験があるから」

「そうかもしれない。根拠もなく盲従することなどありえない」

「人間のようには？」

「そのとおり」

アンドレは指の間で短くなった煙草を、メタルトレーの上で丁寧に消し、穴の中に捨てた。

「だから猫に宗教はない」

突然ふりかかったしわがれ声に目をやると、青いツーリングジャケットに身を包んだコンドウが立っていた。

「人間は自分の手に負えない精神の部分をすべて、宗教という得体の知れない深い井戸の中に投げ込む。そうすれば一気に楽になれると思ひ込む」

コンドウの青黒い顔は異様に縮んで見えた。

「わたしの妻は、いまその世界にいる」

アカネから聞いた話を思い出した。彼の妻は息子を失った悲しみから立ち直れずに、ある宗教にのめり込み、出家信者として家を去ったという。

「しかたなかったんだ。わたしにはどうすることもできなかった。別々の道を歩むしかないとあきらめていた。自分も追随することは、とうてい容認できることではなかった」

落ち窪んだ眼の中には、深い苦悩が見てとれた。

「わたしは自分が癌になったと知ったとき、何が正しいことなのかを判断する能力を失ってしまった。その宗教を信じなかったから、こっぴどい罰を受けたのかとさえ思った」

アンドレの隣に腰を下ろし、コンドウは胸のポケットから煙草を一本取り出した。

「そんな馬鹿げた妄想にとられるくらい、一時は弱りきってしまった。もうこれで俺も終わりかと思った」

血色の悪い唇にくわえた煙草に火をつけ、弱々しく吸い込む。浅い息で吐き出した。

「幸いなことに、肺癌に効くという新薬が奏効して、少しだけの猶予が与えられることになった。まあ、一時しのぎだろうがね。それでも、どうしても死ぬ前にやっておきたいことを片付けることにした。それは、もう一度妻と話すことだった」

コンドウは、古い車の破れたマフラーから吐き出される排気音のような咳をした。アカネの話によると、手術が不可能なくらい末期の肺癌だというが、わざわざ煙草を吸う気持ちが変わらなかった。

「煙草はやめない。最後まで好きにさせてもらおう。これまでに何度も禁煙を試みたが、自分の意志ではやめられなかった。それを癌になったからってやめるのは、癪に障るじゃないか」

そう思わないか、とコンドウは笑った。

「妻は今、長野県の山中の教団の研修施設とやらにいる。連絡しようとしても、まるで取り次いで貰えない。ある特別なつてを通して、そこにいることだけは、かろうじて知ることができた」

「そこを襲撃しようってわけですか？」

「とりあえず出向いて行くしかないかな。弱みを見せるのはイヤだけど、自分の病氣のことを話して合わせると言ってみるさ。どうしてもダメなら、こっそり忍び込むっていう手もある」

「奥さんを、その要塞みたいな施設から奪還すればいいんですか？」
「気がすむまで、二人で話ができればそれでいい。なにもその宗教団体と敵対しようってわけじゃない」

タカシはコンドウの思惑が、なぜか困難きわまりないように思えた。

「野良猫のように行動すればいい」
のそりと立ち上がり、出発の身支度を始めたアンドレが言った。ついさっきまで足元にいたはずの野良猫たちは、いつのまにか姿を消していた。

三台のバイクは、他のどの車よりも高い速度で、高速道路上を巡航していく。アンドレのGSXRが、怒濤の脚力を誇る赤兎馬のように先頭を飛ばしていく。排気量で劣るタカシのCBは、やっとならぬことと追い縋った。しんがりを務めるコンドウのBMWも、風の塊を逞しく押し返しながらか突き進んでいく。

日本の国土の端まで、高速道路は続いている。延々と風洞の中に身を置いていると、地面すれすれを飛ぶ燕になった気がした。

しかし、最初快感だったその感覚も、数時間を経るうちにただの苦行になった。意識がぼうつとしてきた。巢立ちしたばかりのひな鳥がいきなり、季節風に乗って海を渡る群れに迷い込んだようなものだった。前後を走り続ける二台に、いっこうに疲れは見えない。そんな状況のタカシが見たものは、幻にちがいはなかった。ハンドルにしがみついた腕のすぐそばを、大砲の口から発射されたばかりのような、大きな空気の塊が通過していった。かろうじてその物体を垣間見ると、赤いバイクに乗る赤い女だった。猛烈なスピードでかすめ飛んでいくその姿は、現実のものとは思えなかった。

その赤いバイクの排気管からは、猛獣の鼓動を思わせる破裂音が吐き出され、そいつがイタリア製の二気筒であることがしれた。最新式のドウカティ1098Sだった。

タカシはその姿に目を奪われたというより、魂を引き抜かれた。するすると遠ざかる女の腰から背中へのライン、ヘルメットの端からたなびく黒い髪の下には、滑らかなうなじが見えた。バランスのとれた美しい後ろ姿だった。その後ろ姿に釘付けになった。

先頭を行くアンドレは、まったく反応しなかった。相手が女のせいか、いきなりスピードを上げて追いかけまわすことはなかった。赤いドウカティが走り去った後、タカシはぼんやりとその女性ライダーのことを考え続けた。網膜の上に、特別な残像として刻み込まれていた。

延々と続く高速道路をひた走った。信州の高原道路に到達したのは、執拗な太陽がや々と傾いた頃だった。タカシたちの消耗は極限に達していて、山の上にある宿までのワインディングがやたらと長く感じられた。

いくつかのコーナーを上がったあたりには、温泉宿の灯りがかたまって見えた。そのとき、目に飛び込んできたのは、腹を見せて道路に横たわる赤いオートバイだった。

フィルムのコマを突然止めた。道路に下り立つと足元がふわふわした。転倒した赤いドウカティが、異次元のオブジェに見えた。道路の脇には、赤い革ジャケットのライダーが両足を投げ出し、肩を押さえて座っている。ヘルメットも脱いでいなかった。それは、タカシたちを猛スピードで追い越していった女性ライダーだった。

タカシの胸が、急に高鳴りだした。なぜそんなにドキドキするかわからなかった。そんなことは生まれて初めてだった。高速道路での一瞬の邂逅で、タカシはすっかり心を奪われてしまった。アンドレが無造作にバイクをかかえおこし、タイヤを引きずって路側に移動した。歪んだフロントフォークは、とうてい自走できる状態にはなく、バイクのダメージはかなり深刻に思えた。

「大丈夫？」

コンドウが尻餅をついた女性ライダーに訊ねた。それに反応して、彼女は何度も頷いた。ケガはたいしたことがないさそうだった。女はヘルメットを脱いで、長い髪の毛を自由にした。

「どこに行く途中？」

「そうね、あなた達と同じところ」

意味を図りかねて、コンドウは再び同じ質問をした。

「あなた達の宿に、わたしも御一緒するわ」

すっかりとした声だった。冗談には思えなかった。

「では、どうぞわたしのバイクの後ろにお乗りください」

コンドウがおどけて言った。

BMWの立派な後部座席は、もともと彼女のために用意されていたかのようだった。そのやりとりはきわめて高貴な者が思いつきで口にして、従者が当然のごとく命令に従うという風情だった。

「ありがとう」

彼女はお辞儀をするかわりに、超然として髪の毛を掻き上げた。ポリュームと艶のある黒髪だった。薄暮の中でその美しい横顔を見た。たしかに見覚えがあった。記憶の中からフラッシュバックしたその顔の輪郭を思い出したとき、タカシは驚きの声を上げた。

「あなたは農業法人の入社試験の時の・・・」

人でごった返す廊下の暑さが蘇った。女は面接官の隣で記録をとった。つづけた白いブラウスの事務員だった。金縁眼鏡はかけていない。「さあ、行きましょう。おなかですいたわ」

彼女はタカシに一瞥をくれただけで再びヘルメットを被った。

意識的に言葉を遮ったのか、タカシの顔を忘れてしまっているのかわからなかった。しかし、その態度には一種の自信みたいなものがあった。

面接室の薄暗い蛍光灯の下ではじめて出会ったときに、すべてのことが仕組まれたのかもしれない。まさかな、と思いつながら首を振る。それほど彼女はするりと、タカシたち三人の隙間に入り込んできたのだった。

五

七百キロを走破した体はあちこちが悲鳴をあげていた。荷物を早々に放り出して風呂に飛び込み、きしむ関節をほぐした。コンドウの体を気遣えという、アカネの言葉をすっかり忘れていた。なぜなら、BMWに乗る旅慣れたコンドウが、一番元気で動きもよかつたからだ。バイクツーリングは久しぶりだと笑う顔の血色もずいぶんよくなった。バイク乗りは走ることで、活力を取り戻すものなのだ。かつて国民宿舎だったという旅館は、ところどころ傷みが出てい

る古い建物で、七十歳近そうな老夫婦が二人で切り盛りしていた。繁忙期を外れた平日のせいかな、他に客は水商売ふうの若い女と中年男の一組だけだった。

「はじめまして。先ほどはお世話になりました。わたしの名前はカモンエミリです」

夕食のテーブルで、唇についたビールの泡を拭いながら彼女は言った。小さく尖った顎と鼻の先を、ついと上に向ける癖がある。高慢な感じは少しやわらいでいた。

エミリは会社の有給休暇を取って、一週間ほどの一人旅に來たと書いた。買ったばかりの赤いドウカティは、残念ながら自分には向いていなかったと落ち込んだふうもない。

「転倒したのはウサギを見たせい。草むらから飛び出した野ウサギが、ヘッドライトの光の中で固まっていた。うまく避けることができなかつた」

「轢いたの？」
タカシの質問に答えるかわりに、エミリは話を続けた。

「ウサギの眼の奥を見たの」

エミリはコップのビールをおいしそうに飲み干した。

「それに注意を取られすぎて、ハンドルを操作するのを忘れてしまったの。不思議な目の色だった。うまく言えないけど透明な闇というか、あらゆる感情を超越した黒だった」

信じられないよね、とエミリは薄く笑った。

「たしかにウサギの眼の奥には深い闇がある」

黙って聞いていたアンドレが、突然口を挟んだ。

「ウサギの眼の中の闇は、とても深く怖い」

アンドレは小山のような体の中心にある胃袋に、大量のメシをビールで流し込んでいた。

「そうね、ガラスビーズみたいな黒い瞳の奥にはほんとうになにもない。覗いちやいけないって書いてある壁の穴に目をつけて、底抜けの闇を見ているような感じ。ほんとうに何もいいのか、闇よりもっと黒い何かを見ているのか判断できない。それでつい引き込まれてしまった」

「昔、小学生の級友でウサギの眼を見ておかしくなってしまったやつがいた。そいつは強度のどもりだった」

食事を終えながらアンドレは続けた。

「どもりのせいで、いつも級友からいじめられていたんだ。言葉をうまく喋れないことになんの責任もないのに、ひどく疎んじられていた。つかえながらやっとの思いで発する言葉の断片が、下等な動物の鳴き声みたいにひどく耳障りだった。そいつは復讐のつもりだったのか、みんながかわいがって交代で世話していたウサギを惨

殺した」

コンドウが新しいビールを提げてきて、空になった全員のグラスに注いだ。

「夜中、ウサギ小屋に腹を空かした野良犬を放り込んだんだ。小学生にしては用意周到な、悪意に満ちた行動だった。野良犬が気が狂ったように次々とウサギを噛み殺すのを、小屋の外から眺めていたらしい。いくつものウサギの首が、狭い小屋の中で無惨に落とされていくのを見ていた。足元に転がったひとつの首の中に、そいつはビーズ玉みたいなふたつの眼を見つけた。何の気なしに覗き込んだのが運の尽きだった。ウサギの眼の奥にある不思議な世界が彼を取り込んだ。深遠な恐怖の穴に彼は誤って落ちてしまった。なんに對する恐怖なかわからない。とにかくそいつは、パニックを通り越してフリーズしてしまった。翌朝までそこに突っ立ったまま、身動きすらできなかった。ウサギを噛み殺した犬は、とつくにどこかへ消え失せてしまっていた。おかげで彼の仕業であるというのもばれてしまった。誰に何を聞かれても、彼は自分が何を見たのか、誰にも説明することはできなかった。みんなはウサギの崇りだと噂したが、彼はどもりながらウサギの眼という言葉を、呪文のように繰り返した」

グラスを空にしながら、アンドレは話し続けた。

「そいつは結局精神を病んで、入院させられることになった。俺は彼の見たものにどうしても興味があつて、見舞いを装い病院まで彼に会いに出かけた。ベッドに魂の抜けた顔をして横たわっている相手に、ウサギの眼とはどういう意味か、と聞いた。しかし、彼はもうすでに受け答えのできる状態ではなかった。こちらの言っていることが、まったく理解できないようだった。あきらめて病室を出ようとしたとき、それまでまったくの無反応だった彼が突然、大きなげっぷをしたんだ。驚いて振り返ると巨大ながまがえるが、真っ赤な口を開けて笑いだした。がまがえるにしか見えなかった。笑いながら彼は一度だけ俺の方を見た。その眼を見て俺は凍りついた。彼の眼の奥から深い闇が無数の食指を、俺の魂を絡め取ろうと伸ばしてきた。なおも見つめ合っていたが、幸いにもすぐに彼の方から目をそらした。少しばかり彼に残っていた理性が、俺を守ったのかもしれない。ウサギの眼の意味が、少しだけわかった気がした。今日また、あなたの口から同じ言葉を耳にして驚いたってわけだ」

よく冷えたビールを飲みながら、エミリは終始静かに聞いていた。アンドレが話し終わるのを待ってから、ゆっくりと口を開いた。

「ウサギの眼の中にあるのは、自分自身の心の闇に他ならない。鏡

を見ているのと同じなの」

彼女は自信ありげな口調で言った。

「嘘やごまかしを一切許容しない、すべてを見通す千里眼に見据えられて疎まなない人間はいない。冷徹な審判を下すのは、ほんとうは自分自身の深層意識なの。人はそこに強い恐怖を覚えて、精神を砕かれさえする。この世には、ウサギの眼を持つ人間がいる」

「ある新興宗教の教祖がそうだと聞いた」

コンドウがよれた浴衣の襟を合わせながら口を挟んだ。

「そいつの眼を見ると、たちまち不思議な力に絡め取られてしまうらしい。恐ろしい勢いで信者を増やして、瞬くうちに巨大な宗教団体となってしまった。聖舎と呼ばれる施設が、雨後のタケノコのように全国いたるところにできた。周囲とは完全に隔離されていて、中で何が行われているのかは近隣の誰にもわからない。広大な敷地の中で農耕をしたり家畜を飼育して、自給自足の生活を送っているため、大勢いる信者のほとんどは外に出てこない。聖舎のゲストルームといわれる空間に新規の入信希望者を呼んで、教祖が接見するらしい」

あいかわらず顔は土気色だが、コンドウは舐めるようにビールに口をつけていた。

「いつのまにか妻が入信していることを知ったときは、心底驚いたよ。亡くなった息子の同級生だった子の母親が導いたのだと後で知った。妻はわたしには何一つ話さないで、一人で出かけていたんだよ。何かの趣味のサークルにでも行っているのかと思っていた。気付いたときには、彼女の中に何かが強根ざしていた。わたしはうろたえるだけだった。彼女を取り返す術は、何一つみつからなかった。わたしが咎めだてすると、信仰に身を投じて聖舎で暮らすと言い出した。おまけに、彼女はわたしにきちんと財産分与をして離婚してほしいと迫った。それを訴える彼女の瞳は、底冷えのする意志をたたえていた。すっかり手遅れだった。しかし、当然拒否したよ。わたしは息子に続いて妻まで失おうとしていた。とても耐えられることではなかった」

コンドウは苦しげに唇を歪めた。

「妻は預金通帳を持って、忽然と姿を消した。彼女にとって、それ以外にやりようがなかったのだと思う。離婚はいまだに、わたしが成立させないままだ。その彼女に会うために、ここに来た」

「その聖舎とやらがここにあるのですね」

「ここにいることを知るのにずいぶん時間がかかった。もう間に合わないかと思った」

体の中で増殖を続ける癌細胞を押さえるかのように、自分の肩を軽く揉んだ。

「その教祖とやらの接見を受けた者は、ことごとく熱烈な信徒と化す。どんな人物なのか想像もつかないが、その瞳には不思議な能力

が宿っているらしい。君たちからウサギの眼の話聞いてぴんときた。授命と呼ばれるその儀式は、月に数人ずつ個別に行われるという。教祖は全国の聖舎を巡って、一般の信者の中からあらかじめピックアップされた見込みのある者と接見していく。わたしの妻もどこかでそれを受けたはずだ。それ以来、わたしは妻を、わけのわからない信仰とやらに奪われてしまった。教祖の眼の中に彼女が何を見たのか聞いてみたい。もっと昔にそれをすべきだった。諦めが早すぎたよ。今になって猛烈に後悔している」

「後悔はしなくてもいい」

「エミリは諭すように言った。」

「おなたの奥さんは間違っていないし、別の世界に進むことで心の平安を取り戻している」

驚いて皆が彼女の顔を見た。

「君は妻のことを何か知っているのかい？」

「コンドウの唇が震えていた。」

「わたしの父はカモンリユウト、真実教の教祖よ。父の眼の奥にある不思議な力は、教団をはじめめる数年前に天から舞い降りた。普通のサラリーマンだった父に変化が起こったのは、わたしが幼児の頃。それ以来、その存在をいつも身近には感じていたけれど、直接接触し合えるわけではない。父には大きな使命があるから」

「君も教団の一員なのかい？」

「教団の一部である農業法人の社員ね。あなたが面接に来た会社がそう。革新的な農業を全国組織で行っている」

入社しようとした会社のことなのに、何も知らなかった。教団との接点を隠蔽しているのだろう。

「社員はいずれ皆洗脳されるとか？」

「そんなことはない。普通に農作業をするサラリーマンがほとんど。でも、多くの人は自給自足の理念に感心し、他では得られなかった充足と、大地にかしなく歎びに目覚めていく。その過程で、信仰を見いだす人も少なからずいるわね」

「不採用でよかったよ。そんな会社だとは知らなかった」

「あー、結果の通知はまだ行ってないはずだけど」

「ところで君はなんのためにここににいるのだい？」

「コンドウが聞いた。」

「わたしもこの聖舎に父を訪ねるつもり。ときどき、父に呼ばれるの。直接話すことはないけど、存在を感じることはできる。あなた達の訪問と重なったのは、単なる偶然」

「尾行してきたわけじゃないよね？」

「ありえない」

「ウサギの眼を持つ教祖・・・」

アンドレが呟いた。

「眼の中には深遠な闇、そこからもたらされるのは人格を破壊するほどの恐怖」

「対峙する人は、鏡の中に自らの姿を見る。闇の中から現れるのは、見つめる人自身の邪悪な姿。我が身のあまりの醜怪さに驚き、生きる希望を失ってしまう」

いつのまにか食堂には、誰もいなくなっていた。給仕に来ていた宿の経営者夫婦も、どこかに引っ込んでしまった。足元から這い寄る山の冷気が、戸外の冷え込みを告げている。タカシは背筋を寒さ以外のものにぞくりとさせて、薄っぺらな浴衣の襟を掻き合わせた。

六

翌朝、エミリは忽然と姿を消していた。壊れたドウカテイも、いつのまにかなくなっている。どうやって片付けたのか見当もつかなかった。別世界からの使者のように思えた。

昨日の疲れが、全身をけだるく覆っている。三人は朝の太陽が十分高さを増すまで、泥を噛むように眠った。重い体を引きずってようやくバイクに荷物を戻し、再び走り始める。

初秋の信州の風が、涼やかにジャケットの端から這い込む。澱んだ皮膚の代謝が蘇る。ヘルメットの中で、大きな呼吸をした。しばらく肺胞が、大量の酸素を吸って活性化する。それは股の下でガソリンを燃焼させるエンジンの鼓動と、やがてシンクロしはじめた。いくつものコーナーを次々にクリアしていく。リズムよく軽快に重心移動をこなしながら、路面を滑走する快感に酔いしれる。

三台のバイクはまるで群れ合って飛ぶ野鳥さながら、山深くに分け入っていく。二車線あった舗装路が突然、見通しの悪いダートに変わる。先頭を行くコンドウのBMWは悪路をもともせず、しだいに標高を上げていった。

山道があるとところから脇にそれて、さらにじりじりと上っていった。舗装があるだけの小径を、大きなバイクがのろのろと進む。

山をめぐり取って広げたスペースに、迷彩塗装を施したジープが停めてある。これを運転してきた者はどこに行ったのだろうか、と、思案する間もなく通り過ぎた。太陽は痛いほどの紫外線を、頭上から投げかけてくる。砂漠を泳ぐ金魚のように喘いだ。

突然、コンドウがバイクを路肩に寄せた。見下ろすと、麓の街が箱庭のように睥睨できた。

喉が焼けつくように乾いている。ヘルメットを脱いだコンドウが向かう先には、湧き水の在処を知らせる小さな看板があった。三人

は冷たい山の水で存分に喉を潤し、山肌に突き出た岩に腰掛けて煙草を吸った。うっそうと茂った山肌の上を、三人の吐き出した白い煙がたなびいていく。

草むらから数人の男たちが、ばらばらと飛び出してきた。カーキ色の迷彩服に頑丈なワークブーツを履いた男たちは、不穏な気配を漲らせている。ジープの持ち主たちにちがいがなかった。

「どうも自衛隊には見えないね」

コンドウが煙草をもみ消しながら言った。

「ここに何をしに来た？」

四人の屈強そうな男たちは揃って、角刈りに幅広い肩をいからせている。

「報告する義務があるのか？」

アンドレが鋭い目で見返しながら言った。

「残念ながら、ここは私有地だ。勝手にうろついてもらっちゃ困る」

「まさかこの山全部がか？」

コンドウが驚きの声をあげる。

「そのとおり、我々の教団が所有する山林だ」

リーダー格の男が、三人の背中の後ろから答えた。発達した顎角を持つ精悍な顔つきの男だ。尖った頬骨の上には、古い傷跡が斜めにこめかみへ向かって這い上がっている。

「完全な闖入者ってわけだ」

この男たちは、どこかで見張りをしていたらしい。

「迷い込んだだけだっというなら、すぐに戻ってもらいたい」

高圧的にリーダーが言った。

「迷い込んだわけではない。明確な意志があって、わたしは今ここにいる。君たちの聖舎とやらに監禁されている、わたしの妻に会うために来た。妻を帰せとわめきたいところだね」

黒ずんだ顔の中で光る眼を、コンドウはリーダーの男に向けたままそらさなかった。

「監禁だなんて、あなたは大きな勘違いをしている」

頬に傷のある男は、三人の部下たちを押しつけて前に出てきた。背は低い、他の誰よりも肩幅が広くて胸板が厚い。顎を引いて、口唇をあまり動かさずに喋る。

「わたしからしてみれば、略奪監禁にちがいない」

「信者はどなたも、自由意志のもとに行動している。とくに聖舎で暮らす出家信者の方たちは、深い信仰に目覚め、日々精進しておられる。他人に強要されてできることではない。その姿を見ればわかる」

「信仰に目覚めるとは、別の人格になるということか？それまで関わってきた大切な人間を振り捨てて」

コンドウは体調が悪いのか苦しげだった。嫌な感じの咳をした。

「どちらにしても、わたしにはあまり時間がない。なんとしてもともう一度だけ会って話したい。そんなに長くはかからない」

リーダーの男は鋭い目をして、じつと聞いていた。

「君たちから取り次いでもらえないだろうか？」

「できない」

毅然と拒絶する。この男たちに融通という言葉はないらしい。

「こいつ」

背後で迷彩服の男の一人が、かすれた声をあげた。アンドレがその胸ぐらをわしづかみ、両足が浮きそうなほどねじ上げていた。

「放せ」

残り二人が色めき立ち、アンドレに駆け寄る。格闘技の心得があるのだろう、動きが静かで無駄がない。

「はなすとも」

アンドレは持ち上げた男をふわりと虚空に投げ返した。向かってきた男たちが受け止めそこねて、仰向けにどうと倒れ込んだ。

「きさま」

ゼンマイ仕掛けの人形のように、三人は揃って飛び起きた。空手が拳法の構えを作って、アンドレとの間を詰めていく。リーダーの男は酷薄な笑いを浮かべたまま、その様子を眺めている。

「やめなさい」

突然、背後から女が一喝した。聞き覚えのある声だった。

カモンエミリが赤い革ジャケットにライディングブーツのいでたちで、そこに立っていた。

「そこまでだ。やめろ」

態度を豹変させたリーダーが、鋭い声を飛ばした。

「わたしの知り合いよ。聖舎に入りたいという願いを聞いてあげるつもり。教祖の許しを得たところよ」

「了解しました」

よくしつけられたシェパードのように、おとなしく引き下がる。アンドレと睨み合っていた男たちは、不服そうな表情を残して肩を落としたりとした。

「聖舎に入れるように話をつけてある。ただし、コンドウさんだけ」

「妻に会わせてもらえるのかな？」

「たぶん、本人が拒否しなければ」

「わたしにはもう時間がないという話を伝えてくれたかね？」

「ええ、彼女はすでに知っていたわ。あなたがやってくるだろうと、予期もしていたみたい」

コンドウが驚いた顔をあげた

「なぜ、そんなことが？」

「教祖のもとで長く修行を積むと、それくらいのことではできるようになる。人によるけどね」

エミリはちらりとアンドレの顔を見た。アンドレにも似たような能力が、幼少の頃の落雷をきっかけに宿ったことを聞いていた。

「はやく、行ってください。聖舎へはオオクボがご案内します」

エミリが促すと、オオクボと呼ばれたリーダーは、感情を消した口ポットのような顔で頷いた。

屈強な兵士たちは捕虜を連れ去るように、コンドウを従えて立ち去る。あとにはタカシたち三人が残った。

「することがなくなつた」

タカシは山の中の涼やかな空気を肺胞に満たしながら、晴れわたつた空を仰ぎ見た。路肩に停めたバイクにもどる。

「ちよつと、ここで待っていて」

エミリは足早に茂みの向こう側に消えた。煙草をふかすヒマもなく、特徴的なエンジン音がして白いバイクが駆け下りてきた。

初期型のヤマハRZ250にまたがるエミリは、タカシたちの前で止まり、ヘルメットのシールドをちょいと上げて、「せつかくだから、走りましょう」と言った。大急ぎでヘルメットを被り、バイクのエンジンをかけた。

舗装してあるとはいえ、狭い下りの山道を、エミリのRZ250はするするとコマネズミのように駆け下りていく。かすかな白煙の中に、2サイクルオイルの焼ける香ばしいにおいが混じっている。タカシのCB750Fは、重い車体を振りながらやっとの思い出で追い続けた。少し離れて、アンドレのGSXR1000が、余裕を見せてついてくる。

後ろから眺めるエミリの腰つきは、高速道路でタカシを魅了したのと同じく視線を釘付けにした。革パンツに浮き出る腰からヒップへの滑らかなラインは、どんな美術品よりも完璧な美しさを見せる。教団の私有地だという山を、一気に下ってしまふ。妙な圧力から解放され、体が軽くなった。RZ250はうまく道案内をつとめ、2車線の真新しいアスファルト道路に出る。RZはためらいなくアクセルを開けて、籠から解き放たれた燕のように飛翔をはじめた。いやというほどのコーナーが繰り返される。リズムよく体を動かし、左右にバイクをコントロールしていく。重力に逆らって交互に尻を振り、車体をぎりぎりまでバンクさせる。タイミングよくアクセルを開け、エンジンの鼓動を後輪の駆動力に変える。

やがて腰から下が、内燃機関に同化したような快感にうち震える。伝説の半人半獣に化身した三匹は、じゃれ合いながら山を縫うワインディングロードを駆けめぐる。

山の頂上にぽっかりと開いたヘリポートほどの空間に、やがて三

匹は羽を休めた。ヘルメットを脱ぐエミリの首に艶やかな黒髪がふりかかる。匂い立つ香気が、周囲の空気をゆるませる。

「気持ちいい。やっぱり、わたしはこのバイクの方がいい」

ドウカティの最新型を粉々にしたエミリが、あっけらかんと言う。「わたしと同じ年に生まれたこのバイクは、亡くなった母が乗っていたものなの。聖舎の片隅で埃を被っていたのを、昨年やっとレストアした」

バイクにもたれて、三人は煙草を吸った。白いタンクに赤いラインの入ったRZ250は、二十年以上前のバイクとは思えないほど隅々まできれいだっただけ。

「母が亡くなってすぐに、アレが父のもとにやってきた」
「エミリは長い指先で肩に掛かる髪を払う。」

「わたしが五歳の時、アレが父の中に入り込んで、父は教祖になる道を選んだ。それ以来わたしは、たった一人の家族である父とは、決定的に遠ざかった。施設の中で、信者の女性たちに育てられた」
「エミリがアレと呼ぶものの正体を想像してみる。」

「理解してもらえないかもしれない。でも突然父の中に何か舞い降りたのは事実なの。医学的には二重人格だとか、分裂症だとかいうんだらうけど。あきらかに異なった人格になった」

「そういうこともある」

「アンドレがぼそりと言った。」

「父は教祖となって、多くの悩める人たちを救済しはじめたけれど、娘であるわたしのことは完全に忘れてしまったかにもえた。しだいに大きくなる教団の中で、すぐ近くにいながら、父と顔を合わせることはめつたにない。会話も成立しない」

「自給自足の生活を実践しているというけど、教祖一人ですべてを運営できるはずがない」

「タカシには組織の巨大さが信じられなかった。たった一人の人間の神がかりな能力だけで、全国に無数の聖舎や直営農場を持つ何万人もの集団ができたのだ。それも数年のうちに。」

「信者の増えていくさまは、まるで癌細胞の増殖に似ていた。むくむくと細胞分裂しながらクローンを生み続ける。そのうちに組織の一部が自然に、運営のみを受け持つ専門家集団として進化していった。法律を熟知したうえで、資金を集めて土地を買い、法的な立場を組織に与えながら、ねずみ算式に規模を拡大していったの」

「教団の目的はなんだったというの？」

「タカシはじわじわと違和感を深めながら聞いた。」

「すべての人類の救済と解放」

「何から？」

「自らの呪縛と鬱病的閉塞からの」

「そんなことがすべての人間において、教祖の瞳をちらりと見ただけで可能になるわけ？」

「ということもある」

「信じられないね」

「あなたが信じなくても、教団はこれからもまだもつともつと大きくなる」

「大きくなって、やがて世界制覇を成し遂げる」

「世界宗教になることを目指している」

「まじかよ」

タカシは真実教の教祖、カモンリュウトに会ってみたくなくなった。その眼の中にあるという世界に触れてみたいと思った。

「あんたは教祖の目はウサギの眼だと言った」

アンドレが新しい煙草に火をつけながら口を挟んだ。

「ある者には失意のどん底から這い上がる希望を与え、ある者には地の果てへ追いやられたまま孤独死するほどの恐怖を与える。覗き込む者によって、何を受け取るかは千差万別、信者になって離れなくなる人もいれば、震えながら退散する人も多い」

「教祖が選択する？」

「いいえ、選択はしない。教祖はただ見せるだけ。自らの眼の中に相手のすべてを分解し再構築して写し出す。その姿を見るのはずいぶんと勇気があることだと思う」

「それが救済にあたるのか？」

アンドレの頭上から、初秋の太陽が柔らかな光を降り注ぐ。

「どちらに転ぶにしても、救いと言っていていいと思う。なぜなら、その接見を受けた後、人々はことごとくそれまでとはちがった人生観を持つことになるから」

「あんたは自分の父親であるその男の眼の中に、深い恐怖を見ると言った。自分自身の何を怖れるのか？」

「どうしようもない孤独の中に取り残された、壊れたマネキン人形のような自分を見る。それは、死に神を見るより怖い。」

革ジャケットに隠された豊満な胸を両腕に抱きながら、エミリはかゝる顎を振った。

「父親が養育をおざなりにした娘に見せるものがそれか？」

「父はどこにもいない。あるいは教祖の中のどこかに幽閉されているのかもしれない。わたしは父を捜したい。信者の一人としてではなく、娘として」

「教祖は聖舎でなにをしている？」

「何人かの信者の接見を行っている。コンドウさんの奥さんも、元奥さんと言った方がいいかしら、そのために来ている」

「連れ帰ることができればいい」

「本人にはその意志はないと思う。息子さんの死がもたらしたものは、彼女にとってはあまりに苛酷で大きすぎた。長い年月経過したのに、コンドウさんにはそれを溶かすことができなかつた」

「教祖のまやかしで、たちまち癒されるとでもいうのか？」

「彼女は自分のほんとうの姿をもう一度見つめ直して、どうしたらいいのか悟るのだと思う。導かれるといつてもいい」

「その教祖とやらに会ってみたい」

「タカシは自分のほんとうの姿を見てみたいと思った。

「会えるかもしれない。お互いの何か呼び合えばね」

「エミリは色づきはじめた紅葉のひとひらをつまみ、慈しむように眺めてから湿った地面に戻した。

「そろそろ行きましょう。よかつたらもう少し走りましょうか」

三人は再びヘルメットを被り、勢いよくバイクを発進させる。

信州のワインディングを貪るように駆けめぐつた。目の前を元氣よく走るエミリの後ろ姿を眺めながら、彼女の中にある深い孤独を思った。そしていつのまにか、彼女に対して特殊な感情を抱いていることに驚いた。

七

コンドウが聖舎に赴いてから、すでに半日近くが経過しようとしていた。秋のはやい夕暮れの気配が、しんとした寒さを連れて山肌を這い上つてきた。三台のバイクによる編隊飛行を存分に堪能したあと、エミリはひとり山の向こう側に消えていった。

タカシはアンドレと二人、コンドウのBMWが置かれた道端にバイクを停めた。他にすることもなく、喉の渇きに促されて湧き水の看板へと歩いた。

「さっきの教祖の話、信じるか？」

「タカシはアンドレに聞いた。

「信じるね」

ためらいを見せずに答える。アンドレは何かを確信していた。タカシには、それが何か想像もつかなかつた。

看板の横には一人一人通れるほどの小径があつて、消えかけた矢印が笹林の奥を指し示していた。道とは言えない筋が地面にある。

「水を飲みに行こう」

アンドレが先に立って、両脇から覆い被さってくる笹の枝を掻き分け進んだ。しだいに勾配を増す獣道を、濡れ落ち葉を踏みしめて上っていく。二十分ほど歩くと、汗が背中に集まって、背骨を伝つて流れた。

やがて小さな公園ほどの空き地に出た。山肌を水平に切り取った

棚だった。低い灌木で周囲を塀のように囲われている。

片隅には小さな祠が祭られていた。その傍らに丸太を割って横にしただけのベンチが置かれてある。

背後の山肌から、ちよろちよると一筋の湧き水が落ちていた。水は石の皿の中に落ちて溢れ、再び山の土へと吸われていく。真ちゅうの柄杓を使って、きりりと冷えた湧き水を飲んだ。

赤いペンキの剥げかけた祠の中には、古い木彫りの仏像が黒くすすけていた。おおざっぱに木片を削りだしたその仏像には、不思議な威厳があつて、タカシは手を合わせて拝みたい衝動に駆られた。信仰とはいったいなんだろうと考えてみる。山田輪業のヤマダの言葉を借りれば、バイク乗りにも神様がいます。その神様のご機嫌をそこねるとえらいことになる。

もう数センチ、もう数秒タイミングが悪ければ、自分はすでにこの世にいない。運不運という言葉より、もつと直截な意志に支配されていく。気を抜いた瞬間、足元に蹲っていた大きなヒキガエルに、ぱっくりと命をのみ込まれ、向こう側へ連れ去られてしまう。そういうヤツらが大勢見知っている。自分を生かし、あるいは殺す絶大な存在を神と呼び、信じる気持ちを強めることが信仰の起源であるように思った。

「どうにもできない大きな存在に生かされている」
アンドレが静かに言った。

「その事実からは逃れようがない」

並んで丸太のベンチに腰掛け、煙草を吸う。たなびく白い煙が周囲の木々の中に拡散していく。同時に少しずつ光の粒子が失われていき、夜の帳がはるか頭上から覆いかぶさってきた。

「あなたの考えは正しい」

いつのまにか、アンドレの背後に小柄な男が立っている。薄闇に紛れて向こう側の世界から、ふわりと現れ出たかのようにだった。

頭部と胴体、手足の大きさのバランスになんとも違和感があった。大ききの微妙にちがう別の人形のパーツを寄せ集めてつくったみたいだった。奇異な容姿を持つ男だった。

重力を感じさせない歩き方で目の前を歩き、赤い祠の前にかしずいて頭を垂れた。香木を焚くようなにおいが、鼻腔をくすぐった。

「わたしたちの聖なる山へ、ようこそおいでくださいました」

男は妙にしわがれた声で丁寧に喋った。奥行きのある風貌は、五十歳にも七十歳にも見える。グレーの頭髪を丁寧に七三に撫でつけ、濃い眉や大ぶりの鼻を持つ彫りの深い顔は、他の誰にも似ていない。まったくはじめて見る種類の顔だった。

「わたしを呼んだのはあなたですか？」

アンドレの顔を真っ直ぐに見て、男は言った。

「あなたの放ったシグナルは、ちょうど目覚めと同時に受け取りました。痛いほどのパルスが届きました」

気管のどこかに穴が開いているような男のしわがれ声は、山の樹木の間を抜けてくる秋風のそよぎに聞こえた。呼び合えば会えるという、エミリの言葉を思い出した。

「コンドウさんの奥さんを帰してやって欲しい」

男はアンドレがベンチから立ち上がるうとしたのを、かるく手で制した。そして、修行僧が着るような作務衣のポケットから、銀色のシガレットケースを出した。かちりと音をさせて開く。手作りらしい紙巻き煙草を一本抜き、口にくわえた。

「火を貸してもらえないかな」

逆らうことのできない威厳のある声が、タカシに向けられた。

「彼女は最初、死ぬつもりでわたしのところに来た。精神がほとんど壊れた状態だった」

火のついた紙巻き煙草から、濃い紫煙がたなびいた。

「息子さんを心臓の発作で亡くしてから、彼女の心の中は癒しようのない悲しみで満たされていた。それに囚われて、一步も先に進めなくなっていた。人はときに、このような状態に陥ることがある。運命の理不尽さに納得できずに、忘却という唯一の治療機構を捨ててしまう。それがあまりに長く続くと、やがて自壊する。まさにその直前だった」

カモンリュウト、教祖と呼ばれる男がそこにいた。彼は背筋をぴんと伸ばして、アンドレの隣に腰掛けた。

「別離の悲しみほど、人の生きる力を削ぐものはない。それはわたし自身、身をもって知っている。なぜならこの信仰を得る前に、愛する妻を亡くしたから」

男の煙草からは不思議なおいがした。

「なくしたというか、突然奪われた」

顔色が変わることとはなかった。彼は誰に話しかけるといってもなく、人のいない公園で静かに本を朗読するように話しを続けた。

「わたしの妻と幼い娘は、自宅に押し入った十八歳の少年に、強姦されたあとで殺された。妻は必死で抵抗したが、脇腹をナイフで抉られて絶命した。血の海の中で少年は死んだ妻を犯し、膣内に射精した。この時の精液が逮捕の決め手となったわけだ。真っ赤なペンを頭から被ったような状態になった少年は、部屋の隅で震えていた五歳の娘をも犯した」

男は煙草を絶え間なく吸った。嗅いだことのないにおいがした。それは、鼻腔の粘膜を通して脳の奥底にじわじわと染み込んできて、神経の終末を麻痺させた。

「それがどんなに狂った行為であるか、誰にだってわかるだろう？」

酸鼻な現場は想像もつかなかった。

「何がそんな残虐な行為に、少年を駆り立てるのかわからなかった。彼は血まみれのまま、五歳の幼児の女性器に自分のペニスを挿入し、まだ形の整いさえしないそのヴァギナに手ひどい裂傷を与えた。ただ唯一の救いは、その幼児の命を奪わなかったことだ。悪魔の所業を終えたあと、彼は悠々とバスルームでシャワーを浴び、血を洗った。室内を物色して財布の中身を抜き、わたしの衣服を着用して、何事もなかったかのように玄関から歩き去った。所要時間二時間ほどの行為で、平凡なサラリーマンだったわたしのすべてを破壊したんだ」

遠い過去を懐かしむような口調で、男は話を続けた。

「部屋に足を踏み入れたわたしは、最初何が起こったのか咄嗟に理解できなかった。声にならない叫びをあげながら、血の海に沈む妻を抱え起こして、床にぶちまけられた内臓を拾い集めようともがいた。娘も死んでいるものばかり思った。あまりに大量の血にまみれて気を失っていたから。そのときの記憶を、娘はすっかり失ってしまったっていた。天の配剤ともいうべき幸運だった」

タカシはエミリの顔を思い浮かべた。彼女が母親を失ったことを話したとき、男の話す事件の記憶は欠落したままだったのだ。

「犯人はまもなく、警察によって逮捕された。同じ街に住むその十八歳の少年には、幼児への性犯罪歴があつて、もともと警察からマークされていた。なぜそんな者が野放しされていたのか、当時の少年犯罪への対応は、ほんとうに生ぬるいものだった。おまけに少年には、精神科への入院を繰り返した病歴があつた。彼は医療少年院へと送られただけで、その名前も伏せられたまま、被害者から遠ざけられようとした。騒いだのはマスコミだったよ。あまりにその行為が残虐で猟奇的な内容だったせいで、少年の裁き方についての議論が巻き起こったんだ」

そんな事件がワイドショーを騒がせていたなど、タカシはかすかに思い出した。しかし、その事件と目の前の男とを結びつけることはできなかった。

「連日、わたしと娘の元にも、マスコミがハイエナのように大挙して押し寄せた。犯人の名前はプライバシーの侵害とやらで伏せられても、被害者は大きな顔写真入りで毎日これでもかというくらい報道されるんだからね。まったくどうかしている。やつらは低俗な好奇心を剥き出しにした、ジョーズみたいな連中だった。わたしはその騒ぎから、なんとしても娘を守らなければならなかった。幸い、妻の生命保険金が、それを可能にしてくれた。信じられないくらい大きな額だった。なぜそんな保険を自分にかけていたのか。彼女はこの災厄を予見していたとしか思えない。自らの命とひきかえに、

娘を守るためのお金を残したんだよ」

男の吸う煙草は、いくら吸ってもなくならなかった。懐かしい草いきれみたいなにおいが、暮れなずむ山の空き地に満ちた。うつむいたままのアンドレは眠っているかに見えた。

「わたしは会社に辞表を出し、この信州の山あいの村にやってきた。娘を連れて、大きなボストンバッグひとつだけで他には何も持たなかった。娘の事件への記憶が戻らないことは幸いだった。わたしも忌まわしい事件にまつわるすべてを、きれいさっぱり捨ててしまいたかった。それから逃れようとしたんだ。血まみれの妻の姿が脳裏から去ることはなかった。ただ娘を守りたい一心が、わたしを突き動かしていた」

男の吐き出す煙に、おかしな作用があると気付いた。それは媚薬のように効いてきた。脳の痺れを感じている。麻薬かもしれないと思つたが、もはや腰を上げる気にはならなかった。

「山の中腹にある小さな空き家を借り、娘と二人で引きこもることにした。天気の良い日に庭に出てひなたぼっこするくらいで、二人ともほとんど家から出ない生活を続けたんだ。誰にも会いたくはなかった。食料や最低限生活に必要なものを、大量に買い込んで保存し、テレビや新聞も見なかった。静かに娘の様子を見守ることにした。娘は事件以来、誰とも口をきかなくなった。固い殻に閉じこもつたまま、ただ息をする人形のような状態だった。促すと食事や排便はするが、意志を伴った行動ではなかった。わたしは娘の受け持った傷の深さを知った。何もできないことが、とても苦しかった」

抑揚のない声で男が言った。

「しかし、ここに来て半年くらいしたとき、奇跡が起こつたんだ」

奇跡という言葉、男は口にした。巨大な宗教組織の頂点にある教祖の仮面を、今は下ろしているように思えた。

「わたしは夢を見るようになっていた。最初たまにだったのが、毎夜同じ夢を繰り返し見るようになった。それは美しい妻の姿だった。わたしと出会うよりもっと年若い頃の、それは美しい少女の姿をした妻が、目の前に現れたのだよ。悲しそうな顔でなにかを訴えた。そうにしてはいる。わたしは金縛りにあって動けない。横たわつたままその姿を見上げている。深い苦しみに沈んだままのわたしを助けに来てくれたと思つた。事件から時間がたつても、苦痛は決して薄まることはなかった。そこにあるのは、絶望を纏った別離の悲しみだった。隣で音もたてずに眠っている娘の一生を、どうしていつたらしいのかわからなかった。本来ならば無邪気な幼女時代を終え、美しい少女に成長するはずの娘の人生は、強制的に寸断されてしまった。ゆらゆらと蜻蛉みたいに立つ妻に答えを求めて、わたしは夢中で声を振り絞つた。そして、幻灯機の映像のような妻が、何度も同

じ仕草を繰り返していることに気付いた。両手で目の回りに筒を作り、双眼鏡を覗く動作をゆっくりと何度も繰り返していた。何かを見ろと言っているようだった」

アンドレは完全に眠りに落ちていようように見えた。男は誰に語るでもない独白をいつまでも続けた。

「わたしはようやく手を動かし、妻を真似て掌を丸めてみた。すると妻が覆い被さってきて、掌の双眼鏡を重ねた。双眼鏡の中で見つめ合った。わたしがのぞいたものは、妻の瞳ではなかった。深い井戸の底に横たわるのは、太古からの静けさをたたえた無の水面だった。光も音もない世界だった。その水面に浮かび上がったのは、誰かのデスマスクだった。死体から直接型を取ったらしいリアルなそれは、闇の中に眼を閉じて浮かんでいた。見つめていると、それがわたし自身のものであることに気付いた。その表情が物語るものの意味が、急に胸に落ちてきた。断ち切られたと思つた過去から未来へ繋がる一本の線が見えた。妻がわたしに知らせたかつたことが理解できた。何も案じることはない、自分はあなた方の記憶の中にいつまでも住んでいるのだと伝えていた。生と死の区別と境目、それが暗い井戸の水面だった」

何かを慈しむように、男は指先を動かした。細い煙をたなびかせていた煙草は、どこかへ失われていた。

「同じやり方で、わたしは娘の眼の中を覗き込んでみた。すると、理不尽な暴力によって遮断されていたスイッチが突然入ったんだ。息をするだけの人形みたいだった娘は、時間をかけて感情を取り戻していった。虚ろだった表情も精気を蘇らせていったが、事件の記憶だけはすつぽりと欠落したままだった。私の眼の中に彼女が何を見たのかわからない。その後、親子二人に束の間の平安が戻つたかに見えた。ここに来て、ちょうど一年がたとうとしていた」

タカシは男の話を夢中で聞いた。子供の頃のエミリの姿を想像してみろ。彼女の身に起こつた出来事には、妙なリアリティがあった。「しかし、それも一人の闖入者によって打ち破られることになる。事件の記憶が世間から風化しかけていたある日、雑誌の記者がどこで嗅ぎつけたか、山の家を訪ねてきた。彼の興味は、もっぱら娘に向けられていた。五歳で性的暴行を受け、記憶を喪失した幼女のその後、彼は鮫のように獰猛で旺盛な好奇心を示した。最初は慇懃で控えめな態度だったが、やがて異常な執拗さでつきまといはじめた。何がその原動力なのかわからない。わたしは心底辟易したが、毎日やってくる男を追い払う術はなかった」

大人になつたエミリの姿と、傷つけられた少女とを結びつけてみた。うまく繋がらなかつたが、彼女に対する特別な想いが厚みを増した。「事件を忘れて明るく振る舞う娘の姿を見て、記者の男は驚いてい

た。大きく傷ついた心を何が癒したのか？と聞いてきた。暴力によって成長を歪められた姿を期待していたんだ。報道の自由をうたいながら、愚劣な好奇心を満たすためだけに生きているような男だった。怒りを通り越して、哀れみを感じるほどだった。わたしはしっかりと食い下がる男に、ふと思いついて娘にしたのと同じ掌の双眼鏡を見せてやった。効果はてきめんだった。男はぶるぶると震えだし、蒼白になって失禁したんだよ。私の眼の中に見たものがなにかは知らない。腐った肉を漁るハイエナみたいな男を壊すほどの恐怖を与えたんだ」

ウサギの眼の中の恐怖について、エミリが話したのを思い出した。「しばらくして、男は再びやってきた。やつれきった風情で涙を流しながら、彼はわたしに礼を言った。自分は生き方を改める決意をした、あなたがわたしに教え諭してくれた、これまでで唯一信じたことのできる天啓だった。これに身を委ねてみようと思う、娘さんがあんなひどい目にあつたのに、元氣を取り戻した理由がわかった、わたしをも、あなたは分け隔てなく救ってくれたんですね、と彼は言っていて泣いたんだ。わたしはただ黙っていただけだった」

男は愉快そうに笑った。潮が引くように光が去っていった。それと交代にグレーの夕闇が、きらめく星空を背負ってやってきた。

「その記者は、わたしの家に置いてくれと言ってきた。それがこの教団誕生の第一歩だった。彼はわたしたち親子の世話をみながら、どこからともなく悩める人々を連れてきた。わたしはそのことごとくに、自分の眼の中をぞかせてやった。何を受け取るかは、人によってちがっていた。猜疑や拒絶を示す者、畏怖する者、後悔や反省を抱いてひれ伏す者、さまざまだった。多くの人々が集まってきた。信者となつてここに留まり、自分たちの資金を投げ出して、教団を大きくしていったんだ。教団のために特殊な能力を発揮する人が大勢いて、資金を株式の運用で増やしたり、土地や不動産を購入して全国に施設を拡充していき、あるいは有機農法をはじめて作物をブランド化して売ったり、会社を作ったりした、わたしが書いたという何冊もの本が出版された。雪だるま式に組織は人も物も金も増やしていった」

星明かりがあたりを照らした。不思議なほど闇は薄かった。「わたしは御輿の上で、何もせず座っているだけでよかった。ときおり、幹部と称する誰かが連れてくる人間に眼の中を見せた。接見と称しているがね。それをするたびに、加速度的に教団は大きくなっていったんだ」

男はさらにおかしそうに笑った。

「ひとつつきいてもいいですか？」
タカシは口を開いた。

「いいとも」

「あなたの奥さんを殺した青年はどうなったんです？」

「わたしの元にいるよ。とことん精神を病んで、自らの命を絶とうとしていたのを、あるとき、誰かが連れてきて接見を受けさせたら、それ以来、命をも投げ出すことをもいとわなない信者となった」

屈強な番犬のように、敷地内を巡回する迷彩服の青年たちを思い出した。

「憎まなかったのですか？」

「憎む必要もない。生と死の意味を理解していれば、憎む必要などなくなる」

男は天空に蠢く無数の星たちを見上げた。星明かりだけで、周囲が何不自由なく見晴らせることが不思議だった。

「なぜあなたはそんな話を聞かせてくれるのですか？」

「娘があなた達を選んだからだ」

「そう、特別な客として。だからあなたの友人の希望もかなえることにした」

ゆっくりと男は腰を上げた。

「さあ、そろそろ行きましょう。娘もお待ちしているはずですよ」

男は背後の茂みに、吸い込まれるように姿を消した。タカシは慌ててアンドレを促し、躊躇なくその後続いた。

獣道が山肌を縫って続く。男の姿は見えないが、その気配だけを追って必死に、硬い岩の突き出た地面を踏みしめる。

長い時間歩いた気がする。やがて急峻な崖の上に、堅牢なコンクリートでできた建造物が見えてきた。山を半分覆うほど巨大な要塞だった。

間近で見上げると、さらに威容を増した。神々しいまでに瞬く無数の星たちの足元に、それは重くうずくまっていた。

中にいる者たちの気配を、分厚い壁が遮断していた。向こう側にカモンエミリがいるのだと思った。タカシは彼女に強く呼ばれていると感じ、重い鋼鉄の門をくぐる勇気を奮い起こした。

八

建物の内部は、白一色の世界だった。床も壁も天井も磨き上げられた純白のタイルで覆われている。点在する小さな照明が、その白に乱反射して眼も眩むほどの明るさを放つ。頑丈につくられた核シエルターを思わせた。

教祖と呼ばれる男の姿は、どこかへ消えてしまった。迎えたのは、昼間に見たオオクボという顔に傷のある青年だった。彼は無言で先

に立ち、建物の深部へと導いた。

延々と長い通路が続く。その両脇には等間隔で、銀色のノブがついたドアが並んでいた。その中に何があるのか誰かいるのか、まるで窺い知れない。まったく無音の世界だった。

「どうぞ、こちらで休んでください」

オオクボは感情のない声で言い、無数のドアのひとつを開いた。オオクボの肩がわずかにアンドレに触れたとき、一瞬不穏な空気が流れた。すぐ平静を取り戻した彼は、後ろも振り返らずに立ち去った。

「なんだ、ここは」

白いタイルで覆われた部屋の中には、ふたつの白いベッドと白い革張りのソファが置かれてあるだけだ。柔らかいソファに体を埋めて、テーブルの上に足を投げ出した。

「腹が減った」

ひどい空腹を覚えていた。

「見られている」

アンドレは正方形に近い部屋の隅々を眺め回してうろつき、座ろうともしない。

「どうとでもなれだ、とって喰われることもないだろう」

「わからない。気味が悪い」

アンドレが不安を口にするのは珍しいことだった。突然、ドアがノックされ、再びオオクボの声がした。

「食事の用意ができましたので、こちらへどうぞ」

タカシたちは顔を見合わせた。

再び白い廊下に出て、オオクボの背後を歩く。背はそう高くはないが、異様に肩幅が広い。格闘用に鍛え抜かれた筋肉を隠している。細い眼と尖った鼻は猛禽類を思わせた。

「信者と同じ食堂になります。どうぞ好きなだけ召し上がってください」

案内された部屋は、体育館ほどもある広大なワンフロアで、ここもすべての調度を白で統一してある。無数の白いテーブルと椅子が整然と並べられ、中央にはバイキング形式に料理を置いてある。白い法衣のようなものを着た百人ほどの信者が、静かに食事を摂っていた。

「とにかく、食おう」

冬眠から覚めた熊のように飢えていた。皿に盛れるだけとり、むさぼった。

「うまいな」

タカシは胃の中に落ちていく料理が、粗食に見えてじつは、とびきり上質であることに驚いた。玄米は香ばしくふっくらと炊けて甘く、とれたてらしい有機野菜のメニューは、肉や魚がなくても十分にう

まかった。芋、人参、玉葱は味の濃さがまるでちがっている。山の恵みの茸や山菜が、ふくよかな滋味を舌に伝えてくる。二人は胃袋の求めるままに、ががつと豊かな大地の恵みを食し続けた。

「なんと、これは酒だ」

アンドレは中央のテーブルから提げてきた白い徳利から、大ぶりの湯飲みに薄桃色の液体を注ぎながら唸った。

「どぶろくか？」

「醸造した米に、香りのあるなにかをブレンドしてある」

湯飲みを傾け、ごくごくとおおる。タカシもつられていい香りのする液体を喉に流し込んだ。腹の中にほんのりと優しい熱がともった。

しだいに酔いがまわる。食欲が満たされてやっと、あたりを見回す余裕が出てきた。周囲のテーブルで夕食をとる信者たちに目をやった。タカシたちを遠巻きにして、白い衣服を身につけた男女が、羊が草を食むように口を動かしている。誰も喋らない。会話というものが欠落していた。

やがて、不思議なことに気付いた。半数以上の者は白いアイマスクを着け、手探りで箸を動かしていた。拘束されているようには見えない。自らの意志によるものと見受けられた。

「なにをしているんだ、彼らは？」

タカシは膨れた腹を撫でながら呟いた。口当たりのよすぎる酒をしたたかに飲んでいた。アルコールが膨らんだ血管を、猛烈な勢いで駆けめぐる。

「ひとつひとつの食材を暗闇の中で吟味することで、亡くなった大切な人に思いを巡らし悼んでいる」

背後の声に振り返ると、カモンエミリが立っていた。赤い革ジャンを脱ぎ捨てて、他の信者と同じ白い衣装を身に纏っている。

「生前にどんなものが好きだったか、どんな味を好んだか、食べ物にまつわるその人のエピソードはいくらでもあるはず。見えなくすること、味覚がより繊細になって、記憶がさらに鮮明になる。」

アンドレの隣にするりと腰掛けた。薄桃色の酒を湯飲みにとって、乾杯するように掲げて口をつけた。

「出家信者の多くは、愛する人を失った別離の悲しみを、ひとりでは抱えきれなくなってここに来た。教祖による接見をきっかけにして、生きる道筋を見いだそうとしている」

「目隠しして食事するのも、その修行のひとつなんだね」

「亡くなった人を悼む方法のひとつ。一緒に食事したことを思い出して、その人を深く記憶に残そうとしているの。食は命の根元に通じる。畑を耕し、食物を自らの手でつくりだし、それを日々食するという営みの中で、愛する人の命を永遠に胸に刻もうとしている」

エミリは、さらさらした白い衣服の胸に手を当てて祈った。

「記憶を辿るのに、これは都合がいい」
アンドレがひっきりなしに酒を注ぐ。白い大きな徳利がいつのまにか増えている。

白湯のように酒を飲んだ。体中の細胞が、アルコールの浸透を待ち受けている。意識が滲みぼやけはじめ。弛緩した脳が、古い靴べらみたいな体を支えている。頭の中で、たがが外れる音を聞いた。三人は酒を飲むのを止められなくなった。目隠しして食事をしてきた信者もしだいに消えていき、いつのまにか誰もいなくなっていた。広いフロアに三人の声が木霊した。

「君が俺たちをここへ招いたと聞いた」
ピンク色に頬を染めながら酒を飲むエミリに向かって言った。

「父とは意識の底で繋がっているの。わたしがそれを欲していると感知して、招いてくれた。コンドウさんたちも、この施設の中にいるわ」

教祖であり父であるという男から聞いた、エミリの身に起きた事件を思い出した。記憶が欠落したままだという彼女の顔を覗き込む。

「父から聞いたことを教えてちょうだい」

突然の問いかけに言葉を見失う。

「わたしは母との記憶を取り戻したい。五歳のときに亡くなったという母のことを、何も覚えていないの。父もわたしを取り巻く信者たちも、貝のように固く口を閉ざしている」

教祖がなぜタカシにその答えを一方的に打ち明けたのか、まるで想像もつかなかった。

「大切な記憶がなぜだか、すっぽりと抜け落ちてしまっている。そのせいで、いつもうなされる。無理矢理氷に浸けられて、冷凍保存されている夢をみる。わたしはまだ、わたし自身の人生をはじめることができていない。体の芯に深い傷があつて、それが誰によって付けられたものなのかわからない。治癒せずに血を流し続けているのを、柔らかい羽毛で押さえ続けている」

エミリは澄んだ黒目がちな瞳で、タカシを見つめた。訴えかけてくる視線の強さに、思わずうつぶむいてしまう。

「教祖の接見を望んだけれど、かなわなかった。ウサギの眼の中を覗き込めば、すべてを取り戻すことができる。でも、教祖はそれを許さないの。わたしを遠ざけている」

「許さないのは教祖ではなくて、父親だと思う。彼の中では、それが交互に行き来していて、混乱しているように見えた」
タカシは正直に言った。

「不思議な力を授かった者は、それ相応の責任を負う」

アンドレが強烈な臭いを全身から放っている。教祖という男が吸っていた、紙巻き煙草の臭いと同じだった。全身を弛ませているのは、

アルコールのせいだけではない。

「君に真実を話すことで、彼はその力を失い、君は別離の苦痛に沈み、取り返しのつかないダメージを受ける。それを父として怖れている」

タカシは言葉を続けた。

「そうなれば教団は崩壊する。教祖自身も、まだやるべき事は終わっていないと感じている」

エミリはかるく頷いた。

「教祖の周囲の人間たちは、それを一番危惧しているだろう。君は教団にとっては何か、いつ破裂するかわからない爆弾っていうわけだ。場合によっては排除されかねない。十分気をつけた方がいい」

誰もいなくなつた周囲に目をやり、それでも声を落として、タカシは言った。

「ありがとう。覚えておく」

タカシは事件のことは黙っていることにした。自分がそれを知っていること自体が不思議だった。教祖でありエミリの父である男が、自分に何かを期待したのか、その真意をはかりかねた。

さらに酒を流し込みながら、アンドレは髪の毛を掻いた。大粒の砂が、ぱらぱらと落ちた。

急速に酔いがまわってきていた。瞼を下ろそうとする強い睡魔に抗うことができなかつた。覚醒がしだいにおぼつかなくなる。エミリがピンク色の液体を、唇の端から首筋へと滴らせた。それを見ながら、タカシは意識をフェードアウトさせたのだった。

どれほどの時間が経過したのだろう。タカシは柔らかくて熱いものに包まれていた。裸で仰向けになつて、それが皮膚の上を行き来するのを、ただ受け入れている。

頭の芯がぼやけて、目は霞んでいた。唇を強く吸われる。口の中に侵入してきた舌を、迎え撃つように押し返す。夢中で熱を移し合つた。華奢な肩を抱きしめ、滑らかな肌に愛撫を加える。掌を吸い付ける弾力の下に、コトコトと早鐘を打つ心臓の鼓動を感じた。

エミリのおいを鼻腔いっぱいに吸い込んだ。それはなぜか、慣れ親しんだなつかしいかおりに思えた。張り裂けそうに固く勃起したタカシのペニスを、粘液に濡れた指が執拗になぶる。タカシは声をあげそうになるのをこらえて、エミリの体を両腕の中に抱き込んだ。華奢で折れそうな背骨を持ち上げ、豊かな尻を露わにする。腰から恥骨へ向かう途中の窪みに舌を這わせる。完璧な形の尻の肉をつかみ、羞恥が溶解したるつぼの中に分け入つた。

そのとき、タカシは五歳のエミリに起きた事件を思い出した。彼女のまだ十分に発達しない性器は、獣さながらの若い男によつて傷つけられたという。敏感な反応を見せるエミリの性器にそのときの

痕跡が残っているのか、気になった。

「なにを見ているの？」

くぐもった声でエミリが喘いだ。

「君を見ている」

心の中を見透かされないように、タカシは答えた。

「うつくしい」

自然に出た言葉だった。

「わたしをすっかり手に入れてしまつてほしい」

「もちろん、そうさせてもらう」

ありつたけの思いを詰め込んだペニスを、エミリの中心部に向けておくりこんだ。快樂の波が怒濤のように押し寄せる。頭を振り、気の狂った馬のごとくに腰を打ちつけた。やがて、エミリは身を震わせて絶頂を迎え、それと同時にタカシも射精した。大量の精液を膣の中に放出しきつても、体を離す気になれず、つながったままで余韻を追っていた。

そのとき、タカシは凍りついた。エミリの尻を抱えたまま顔を上げると、暗闇に近い部屋の奥から、ふたつの光芒が見据えてくる。ビーズ玉のように黒い穴だった。カモンリュウトという名の教祖であり、エミリの父である男が、部屋の奥に立ち、こちらを眺めている。いつからそこにいたのかはわからない。

男の眼の中を、タカシは見つめた。白く細い風がたなびき、それは蜘蛛の糸となって絡みついてきた。

すうっと、男の眼の中に吸い込まれた。そこは、深遠なる闇の世界だった。死体置き場みたいに冷えた空気が、急速に体の熱を奪っていく。周囲の闇がいつそう深さを増し、まったくの静寂がやりきれない孤独を押しつけてきた。

一人で置き去りにされる恐怖が支配する世界だった。なすすべもなく頭を垂れたまま、まる裸で立ち尽くしている。

タカシはこれまで自分を訪れた、いくつかの別離をフラッシュバックさせた。自分が幼い頃に病気でなくなった母のぬくもりを想った。自分よりも先に命の灯を細らせ、消えていった愛する者たち、その中にはかわいがっていた犬や猫たちも含まれていた。やりきれない別離の悲しみが、堰を切ったように溢れ出してきた。

「なんなんだ、これは」

両手を広げて空を掻き、もがいた。恐怖と悲しみと諦めが、ごちゃ混ぜになった強い感情にうちのめされた。

「娘を救つてやって欲しい」

頭上から声が聞こえた。カモンリュウトの声だった。

「娘は君を選び、君はそれを受け入れた。わたしにはまだ仕事がある。娘の願いを聞いてやることはできない」

部屋の闇が静かに薄まっていった。冷たく乾いた空気も、いつのまにか温みはじめている。

小さな四角い灯りがともった。部屋の壁にある正方形の窓から、白い光が差し込んできた。それは、完璧な円形をした満月だった。カモンリュウトの姿は、いつのまにか消え去っていた。エミリの姿もあとかたもない。そこは、はじめに案内された白づくめの部屋だった。

立ち去った幻を追う方法はなかった。ひとつの証しは、タカシの体に残るカモンエミリの体液のかおりだった。彼女への想いが、今にも破裂しそうに急速に膨らんでいた。

窓いっぱい真円形の月は、柔らかな白い光を降り注ぐ。タカシはベッドに腰掛けたまま、それをいつまでも眺め続けている。

夜が明けるには、まだまだ長い時間が必要だった。安穩な眠りは、とうてい訪れそうになかった。

枠の中から頑固に動かない満月は、タカシの行動を凝視している。巨大なカメラのように思えた。タカシは衣服を探す気にもなれず、さつきまで体温を分け合ったエミリの裸体を、ぼんやりと思い浮かべるのだった。

九

白々と夜が明けたとき、タカシは肺をつぶされそうな息苦しさで目を覚ました。アンドレの巨体が覆い被さっているのだった。慌てて押しつけようとしたが、死んだ象のように重い。窒息寸前でやっとなど這いだした。目を覚ましたアンドレと二人で、大あくびをして顔を見合わせる。

「なにが起きたか、おぼえているか？」

「バレーボールの倍はあるアフロヘアを搔きながら言った。」

「どうやら誰にも理解できないことを体験したようだ」

「俺はずっと夢を見ていたよ。父親が台風の日増水した川を見に出て行って、とうとう帰らなかった夜のことだ。俺は小学生の頃に雷に打たれて、ときどきだが人の感情が読める能力が身に付いていた。父親の心の中に立つざわめきを知って、とても危ないと思った。」

でも、俺はそのまま行かせた。父親は精神に異常をきたしていて、繰り返される奇行が祖母を憔悴させていたからだ。祖母を守るために、俺は寝たふりをして父が出て行くのを止めなかった。二度と戻らなくても、しかたないと無理に思い込んだ」

「アンドレは煙草を探したがみつからず、足を投げ出して座ったまま話を続けた。」

「祖母は父が死んでもろくに涙を流しませず、葬式が終わったらす

ぐに学校に行けと、かくしゃくとして俺の面倒をみてくれた。それ以来、祖母と二人きりで生きてきた。俺はそれでなんの不足もなかった。祖母もそうだとばかり思っていた」

タカシは白いソファに座って、テーブルの上のグラスを手にした。いつ誰が置いたかわからない水差しの中身は、きりりと冷えたミネラルウォーターだった。昨日、山で飲んだ湧き水と同じ味がした。砂漠で眠ったあとのように、喉が渴いていた。

「でも、じつはそうじゃなかったんだ。認知症の進んだ祖母が毎日口にするのは、亡くなった父のことばかりだ。俺がそばにいても、完全に取り違えている。自殺と目される死に方をした自分の息子に、泣きながら謝るんだ。すまなかった、おまえを見捨てて悪かったと。見捨てたのは、ほんとうは俺なのに。二度と帰らないのを予感していながら、無視したんだから。祖母が、精神を病んだ自分の一人息子をどんなに愛していて、その別離の悲しみに耐えて生きてきたかを、認知症が教えてくれたんだよ。そして、それはすべて孫である俺のためにだったってことだ」

アンドレに、グラスの水を手渡した。彼は無言で受け取り、いつきに飲み干した。

「夢の中で俺は土手の上に立ち、父の後ろ姿に向かって叫んでいる。父は台風で荒れる川縁に下りて、今にも奔流に足を入れようとしていた。だけど、その声は風雨にかき消されて、まったく届かない。やがて、とうとう父は暴れる川の流れにのまれた。浮き沈みしながら流れ下るさまは、なんとも恐ろしい絶望的な光景だった。川面からときどき見える父の顔は、もうすでに死んでしまっているように眼を閉じて血の気がない。デスマスクのような顔だった」

酔いのすっかり抜けた青白い顔で言う。
「今さらになって、俺も父親を失った悲しみにくれている。落ち葉の下に無意識のうちに隠されていた大事なものを、否認なくさらけ出して露わにした者がいる」

「他人の感情の弱い部分を、自在に操ることができる」

「そうらしい。それは相当にやっかいな能力だ」

タカシは自分の脳裏にも、昨夜同じような感情のさざ波が起きたことを話した。

「はやめに退散した方が良さそうだ」

二人は白い壁にきちんと掛けられている衣服を身に纏い、重いドアを開けて廊下に出た。

するとそこには、オオクボが薄い笑みを浮かべて立っていた。

「お目覚めですか？よくお休みになれましたか？」

気味の悪さを口にする気にもなれない。

「じゆうぶんだ。わるいけど、そろそろおいとましたい」

「わかっていきます。戸外はあいにくの雨模様ですが、バイクは整備して、いつでも出られるように準備してあります」

「けっこうなことだ」

「コンドウ先生も、ロビーで休んでおられます」

オオクボに従って向かった先には、青黒い顔のコンドウが待っていた。タカシたちを認めて、かるく手を上げる。

「さて、用は終わった。帰るとしよう」

さっぱりした表情でいい、コンドウは少しだけ足をふらつかせて立ち上がった。コンドウの体から、少しずつ何かが消耗しながら抜け出していつているのがわかる。

昨日の晴天が嘘のようだった。鈍色の分厚い雲から細かい雨が絶え間なく落ちている。ライダーの気分を沈ませるうっとうしい雨が、施設の門の外に並べられたバイクを濡らしていた。

三人は雨合羽を着込んで、バイクのエンジンに火を入れた。十分に暖機運転したあと、アンドレを先頭にそろそろと走り始めた。いつまでもオオクボは、雨の中に立っていた。

高速に乗り一気に下る。得体の知れないものから逃れようと、脱兎のごとくに休むことなく走り続けた。

不意にコンドウが合図して、とあるインターチェンジで下りる。右折して松林を抜け、広い砂浜が続く海岸に出た。砂浜は校庭の土のように固く踏みしめられて、海を眺めながら車で行き来できる、有名な観光スポットとなっていた。

ハンドルを取られたり、後輪が砂に埋まることもなく、目が細かくそれでいて固い砂の上を走ると走る。重くたれ込める真っ黒い雲の下には、同じ色の広大な海が広がっている。突然、別世界に下り立ったような光景に、しばし遠近感を失う。

波のすぐ傍を走る。タイヤを絡め取ろうと執拗に食指を伸ばす波が、すんでのところまで砕けるのを楽しんでいると、突如珍しい動物に出くわした。

背の高い茶色の馬が、乗馬服を着込んだ男女を乗せて、悠々と歩いていく。四頭の馬はどれもすらりとして、血統の優れた競走馬のように見える。見事な四肢をゆっくりと動かし、すぐさま波に打ち消される蹄の跡を砂に刻んでいく。

しのつく冷たい雨が、艶やかな馬の体毛を濡らしていた。手綱を握っているのは、世代のちがう二組の男女だった。従順な馬の背中に、年若い女性が少しの緊張を見せて腰を預けている。雨をいとわず、馬と一体になりながら、ゆったりと散歩を楽しんでいる風情だった。

タカシは前に行くBMWの轍の上をなぞりながら、不思議な既視感にとらわれた。雨の降る暗い波打ち際を、遠い昔に誰かと歩いた

記憶が蘇る。悄然と雨に打たれて傘も持たず、寒さに震えながら手を引かれ、あてもなく彷徨う。それはひよっとしたら、別離の記憶さえ定かでない、母との情景なのかもしれない。なかった。

コンドウは、浜焼きの小屋がある駐車場の片隅にバイクを停めた。何人も旅人が雨の中、海の方を向いて佇んでいる。それら物思いにふける人たちの胸中を、愛する誰かとの別離の悲しみが去来しているかに見えた。降りしきる雨がそれを洗う。

さっきの四頭の馬が、この世のものとは思えない神々しさをもって目の前を通りすぎていく。それを見た親子連れの子供が、海を見つめる両親の周囲を、うれしそうに笑いながら駆け回った。

三人はバイクにもたれかかって、荒れる海を眺めながら煙草を吸った。しめった煙草のいがらっぽい煙が、肺胞の隅々までゆきわたる。ニコチンの刺激が血圧を上げ、冷えた体を少しだけ暖めた。

コンドウはBMWのパニアケースから、小さな紙の箱を出して大事そうに蓋を開いた。中から何かを取り出し、柔らかい紙の包みをほどこいて見せた。

「妻が最後にこれをくれたよ」

サボテンに似た小さな鉢植えだった。棘のついた平たい葉がいくつも重なった、見覚えのない植物がしおれもせず、海の風に揺れている。ふわりと、覚えのあるにおいが鼻をくすぐった。

「月下美人という植物だよ。サボテンの一種なんだそう。一年に一回だけ、夏の夜にその花を開くという」

葉の中途から髭だらけの茎が下に伸び、花のつぼみだという先っぽが途中で鎌首をもたげて上を向いている。

「ぼろりと折れそうだが、どうして強靱な体をしている。温度の調節で初秋の今頃咲くように、時期を少しずらしてあるんだそう。純白大輪の美しく香りのよい花が咲くらしい」

コンドウは膨らんだつぼみを、指先でつついて見せた。「妻はこれを育てている。温室の中に無数の鉢植えが並んでいるのを見た。葉をちぎって土に継ぐだけで、無限に増やすことができる。なんでそんなことをしているのか聞いてみたよ。そしたらそれが、わたしの元を去って、教団に出家入信しようと思ったきっかけだと言った」

コンドウは大切そうに、鉢植えのサボテンを再び紙でくるんだ。

「息子を突然失ってから、妻はその別離の悲しみからどうしても立ち直ることができなかった。心臓に欠陥があるのがわかって息子に、どうしてもいつも付き添っていかなかったのか？安易に激しいスポーツをするのを許したのか？後悔と自責の念は、時間とともに薄れるどころか、ますます彼女を執拗に苛むようになった。わたしはまったくそれを理解してやらなかった。自分が立ち直るために、仕

事に没頭して疲れていたから。二人で四国八十八カ所を巡礼することも試みたが、わたしの仕事の忙しさがそれを邪魔したんだ。妻は知人に誘われて、この教団の集まりに参加するようになり、この不思議な花と出会った。一年のうちに花が咲くのは一度きりで、たった四時間ほど、しかし、見事な咲き方をするらしい。この花をもらってきて、夜中に咲くのをはじめて見たとき、妻はてっきり息子が自分に会いに来てくれたと、手を合わせて泣いたという。わたしは寝室で、躰をかいて寝ていたそうだ」

コンドウは寂しそうに、肩を竦めて見せた。

「輝くように咲き誇った後、甘さのなかに艶めかしさを混ぜ合わせた芳香を残して、花がしぼんだのを見終わったとき、妻は教祖の接見を受けてみることにした。やがて、わたしの元を去り、教団でこの不思議な花を栽培して、出荷販売するのを仕事にした。別離に苦しむ日本中の人々にこの花を届けることを、生きるよすがにしていると笑ったよ。何年ぶりに見る妻の笑顔だった」

箱の蓋が閉じられようとしたとき、その隙間からふたたび、記憶にあるにおいが漏れ出た。そのにおいの正体は、教祖と呼ばれた男が吸っていた煙草の煙のにおいであり、教団施設の食堂で飲んだ薄桃色の酒の香りであった。

「もう一週間ほど咲くらしい。わたしもそれを眺めてみようと思つて、一鉢もらつてきたんだ」

紙の箱を再び、大切そうにバイクにしまい込んだ。

「わたしの命もあともう少しだと、病氣のことを打ち明けて、さよならを伝えてきた。彼女は真実、わたしのことも愛していたと言ってくれたよ。最後の一晚をとにもすることも許してくれた。もうこれで思い残すことはない。この旅の目的も達成できた。付き添ってくれた君たちのおかげだよ、ほんとうにありがとう」

コンドウは青黒くなつた顔を歪めて礼を言った。

そのとき、分厚い雲のたれ込めた空の、もっと暗い海と接するあたりが、しだいに薄い光の層を形成しはじめた。みるみる幅を増したかと思うと、おぼろげな色の帯を浮かび上がらせる。

半円形の虹となるまで、そう時間はかからなかった。騎手たちも歩を止めて、馬とともにそれを眺めている。周囲から、溜息まじりの無数の声が上がった。タカシはその七色の光の帯を、何者かが送つてよこした慈悲深い贈り物のように感じた。

十

旅を終え、痺れに似た疲労を感じてアパートでごろごろしていた。冷えた布団に潜り込んで寝ていると、突然けたたましく携帯が鳴っ

た。アカネからだった。

「おかえり。無事でなにより」

元気な声が、寝惚けた鼓膜の上でころころと弾む。

「コンドウ先生へのヘルプ、サンキューね」

「おやすい御用だよ。けっこう楽しい旅だったし」

「先生も喜んでいたわ。あなた達に助けられたって」

「俺たちも面白い体験をさせてもらった。先生は元気？」

「それが、満足しきって活力が薄れてきてる。それって、とつてもまずいと思うの。もう思い残すことはないって感じで、病気に立ち向かう気力が失せてしまっている」

アカネの心配が、雑音の多い受話器の中で戸惑い渦巻いていた。

「食事も摂らずに寝てばかりいるのよ。薬を飲むのときどき忘れてる」

「コンドウ先生の家に通ってるの？」

「そう、押しかけ家政婦しちゃった。バイク仲間は助け合わなきゃ、なんて言っちゃって」

「けっこう、大胆だね」

「いぶかしげな顔していたけど、自分でも思った以上に具合悪いんじゃないかな、だから先生、素直にありがとうって、受け入れてくれた」

自分の気持ちに素直すぎるのは君だよ、と言いかけて言葉を飲み込んだ。父親ほども年の離れた重病人に、ほんとうに恋をしているのだ。そんなことが可能なかわからない。

「先生の気持ちが一瞬なのはうれしいこと。でもね、それで安らかに死を待つだけってのは、耐えられない。わたしに許されるのは、それを看取ることだけ。あんまりだと思わない？もちろん、こっちが勝手に押しかけて、一方的に気持ちを寄せている。お邪魔虫のわがままなのかもしれない」

「コンドウ先生には、きちんと気持ちを打ち明けたの？」

「そう簡単じゃない。彼、そちらの方面にはかなり鈍感なのよね。体調が悪いと、そういう気にもならないみたいだし」

「病気の方はかなりひどいのか？」

「進行性の肺癌でまぢがない。手術の適応でもないし、抗癌剤による化学療法も期待できない。あとは体の免疫力に頼るしかない。その本人の生きようとする気力が萎えてきてしまっっては、自然治癒力も引き出せない」

ツーリング中ずっと青黒い顔で、体の奥の痛みに耐えていたコンドウの顔つきを思い出した。

「安らかに死んでいこうとしている人に、愛を告白してもいいと思う？」

「わからない」

「少しは真剣に考えてよ。あなたしか相談する人がいないの。彼の心を乱すだけかしら？自分の想いを伝えることが、相手の重荷になるのなら、最後まで我慢するしかないのかな」

「君はそれでいいのかい？」

「いいも悪いも判断がつかない。胸が張り裂けそうって感じ」
行き場を失った溜息が耳にこもる。

「いいのじゃないか。正直な気持ちを引きちんと伝えれば」

タカシは思いつきを口にした。

「あまりに時間が過ぎ過ぎる。自信がなくて、とても怖い」

屈託のない元気を発散している、いつものアカネではない。

「らしくないよ。君は、呆け老人のアイドルなんだろ。結果を怖れず、あたって砕けてみる、その後コンドウ先生の体調には責任を持つ、そんなところでいいんじゃないの？」

無言のインターバルが重苦しく続いた。

「タイミングを見て、そうしてみようかな」

はにかんだ笑い声をくぐもらせた。

「うまくいく秘訣を教えようか？」

「お願い、藁にも縋りたい気分」

「コンドウ先生が持ち帰ったサボテンがあるだろうか？」

「ええ、しょっちゅう眺めては、霧吹きで水をやったり、日光を当てたりして世話しているわ。もうすぐ花が咲くんだって。自分の葉はしょっちゅう忘れるくせに、その変な鉢植えは大切に育てている」

「その花は一年に一回、一晩だけ咲いてすぐにしぼんでしまうらしい。その花が咲く夜を一緒に過ごすといいよ」

その花のにおいの中で、タカシはエミリと体を合わせ深く繋がったことを思い出した。

「ふうん、魔法の花ってわけね」

「縁結びの効果があるかどうか、保証はしないけどね」

「ありがとう。試してみるわ」

アカネは決心したように、少しだけ語尾を強めた。

「でも、呆け老人のは余分」

からからと齒切れのよい笑い声を蘇らせて、アカネは電話を切った。別離を目前に控えた愛に、あえて身を委ねようとするアカネの気持ちに触れ、タカシはカモンエミリに想いを馳せた。教団施設での一夜の出来事を丹念になぞり、胸の奥に熱を帯びた疼きが広がるのを感じた。

誰かを好きになるといふ不可解な感情が、理屈ではなくタカシの精神を支配していた。それは突然、季節外れの嵐のように予想もしない方向からやってきて、狙いすました一撃を頭上に落とした。脳

の回路の一部が落雷によって焼かれ、ぼっかりと穴が開いてしまった。それまで意識していなかった、大切な何かが欠落していた。その欠落を埋めようとする強い欲求が、いくらか押さええても、ひどい火傷から滲み出す血膿のように湧いて出るのだった。

タカシはジャケットとヘルメットを手に取った。ここ数日で、めつきり秋らしくなった涼やかな空気を吸いこみ、アパートの駐車場で佇むCB750Fを引っ張り出した。セルモーターを回してエンジンをかけ、軽やかに走り出す。

自然に街中を抜け、色づく木々を求めて山あいへと足を伸ばした。あきらかに透明さを増した空気を肺一杯に送り込み、いくつものカーブを右に左にクリアしていく。耳の後ろから、すうっともやもやしたものが抜け出していった。

この青いバイクが手の中にある限り、自分は何ものにもなぎ倒される怖れはない。多くのライダーたちが、立ち寄った先でお互いの愛機を眺めながら、やってくるかね御同類、と話しかける気持ちがある。タカシはいつものように、地をかすめ飛ぶ快感に身を任せ、意のままに動く車体を操り続けるのだった。

ろくな就職活動もせず、あいかわらず茫洋とした生活に戻っていた。何かバイトでも探さなければと、求人誌を眺めていると、アカネからメールの着信があった。

「おなか为空いていたら、食事をおごります」

すぐさま了解のメールを返信し、約束のレストランへ急いだ。ツリング直前に来たのと同じ場所だった。

店のガラスドアを押して中にはいると、満員に近い客たちの喧嘩がどっと押し寄せてきた。アカネは一番奥のテーブル席にこちら向きに座っており、めざとく手を振ってよこした。

「お疲れさま、先日はどうもね」

タカシは前回と同じ特製オムライスを頬張りながら、アカネの話を待った。

「月下美人が咲くところを見たわ。ほんとうに感動した」

パスタを絡め取るフォークを休めて、アカネは携帯のカメラで撮った連続写真を差し出した。

「ほら、この髭だらけの茎がしだいに鎌首をもたげながら、赤く色づいていくの。丸く膨らんだ先の玉がしだいに大きくなっていく。中に小さな生き物でもいるような感じ。夜半から開きはじめて、大輪の白い花が開いた。同時に部屋中が薄桃色の甘い芳香で満たされて、なんだか幻想的な雰囲気になった」

咲き誇った白い花卉が、携帯の画面に収まりきらずにはみ出してい

る。サボテンの一種とは思えない派手な花だった。その独特な脳髓に作用するにおいが、鼻の中に蘇る気がした。

「そこで、思い切って自分の気持ち打ち明けたの。体調があまり良くないときに、精神の安定を乱すことを言って申し訳ないけどって前置きしてから。あなたのことが好きなんですって。重い病気にかかっているあなたにとって、余分な負担になるだけかもしれないことはわかっている。でも、どうぞこの気持ちを受け止めてほしい、そしたら私は恋人として、気兼ねなく献身的にあなたに尽くすことができる。そして、何よりそれをきっかけに病氣と闘う気持ちを持つて欲しい。私のために、一日でも早く良くなる気持ちを保持してほしい。他に何も望むことはありません。私のことが恋愛対象ではなくて、ただご迷惑なだけなら、いつでも目の前から消えて差し上げますってね」

「すごいね」

「自分でも信じられなかった。コンドウ先生は、あつけにとられた顔で聞いてた。苦しそうに、自分にはもう寿命が残っていない、それは君も気付いているはずだ、わたしのような者にそんな気持ちを向けてくれることは本当にうれいけれども、それに答えてあげるだけの時間もパワーも十分には残っていない、だからこのまま静かな関係で終わらせた方がいいのじゃないかと思う、とおっしゃったの」

「うん、わかる」

「ところがわたし、がああん、て火がついちゃったのよ。なぜだかわからない。今は満開で咲いていても、あと四時間もしたらしぼむという、あの妖花の放つ不思議な毒氣にあてられたのかもしれない。この花だって一夜限りに咲くのでしよう、それで何を後悔することがあるでしょうって言って、ばあっと服をぬいじゃったのよ」

顔を赤らめてうつむいた。

「それで？」

「うん、そういうこと」

アカネはうつむいたまま、パスタをちゆるっとすすった。

「信じられない」

「ほんとに、自分でも」

「後悔してない？別離の悲しみに耐えられる？」

タカシは胸の中を少し熱くしながら聞いた。

「もちろん、それはとつても怖いことよ。でも、健康な人だっていつか死ぬし、いつまで生きるのかわからないわけじゃない、それまでの一日、いいえ一時間を大切に愛し合って、密度の高い時間を過ごせればいいって思うことにしたの。そして、その時間を少しでも長くしたいってというのが、神様へのお願い」

「先のことは誰にもわからない。願いが通じるといいね」
不思議な能力を持つ教祖のことが、頭に浮かんだ。

「がんばるわ。コンドウ先生にも、少し元気が戻ってきてるの。もうすぐここにも来ることになってる」

「愛の力に不可能はない」

「そう、愛は強いのだよ。ということ、もうひとつ迷ってることがあるの、相談していい？」

「断る」

「いいじゃないの。ねえ、もし妊娠したら、子供を産むっていうのはどうかなあ？」

「その勇氣には敬服するけどね。君の親なら反対するだろうね」

「残念、反対するような親はいないのよ、わたし」

アカネについて、何も知らないことに気付く。

「二人の愛の結晶を、一人で育てていく氣力、能力はあると思うの」
タカシは、温かいものがこみ上げてくるのを、どうにも押さえきれなくなった。本当は、その場で立ち上がって拍手を送りたいところだった。

感極まりかかったところへ、幸か不幸かコンドウ先生本人がやってきた。タカシの顔を見つけて、よお、と鷹揚に片手を上げて挨拶する。

「先日はどうもありがとう。おかげさまでいい旅ができたよ。ろくなお礼もできてなくてわるいね」

土気色にくすんでいた顔色に赤みが戻り、ずいぶん元気になった。

「おめでとうございます」

「ああ、話は彼女から聞いてくれたんだね」

照れ臭そうに鼻の頭を掻き、フレームレスの眼鏡を押し上げた。

「女房ときちんと話ができて、きれいにさよならを言えたと思ったら、最後にこんな素敵な恋愛ができるだなんて想像もしてみなかったよ。ほんとに人生、何があるかわからない」

眼を細めて、幸せそうに笑った。

「最後だなんて言わないで。まだこれからだって」

アカネが横で目を潤ませながら言う。

「うん、ありがとう。おかげで最近、体調もいいよ。君の作ってくれる食事のせいかな」

「いいえ、それはあなたが持ち帰った、あの変わったお酒のせいかもしれない。あれを飲み出してから、なんだか様子が変わってきた気がする」

「薄桃色のいい香りのする酒だね」

タカシはその酒を、自分も飲んだことを話した。

「月下美人の花と同じにおいがするんだ。そのエキスを含んでいる

のかと聞いたら、教団の人間は部外秘だといって口を閉ざした。でも、不思議な作用があることはまちがいない」

幻覚作用もあるらしいと言いかけてやめた。癌細胞を抑える薬理作用がないとも限らない。

「あの晩、教団施設の一室で妻と話したあと、教祖だという男の部屋に呼ばれて行ったんだ」

コンドウは熱いコーヒーを、スプーンで冷ましながら話し始めた。「部屋に入ったとたん、金縛りにあったように直立不動のまま動けなくなった。男の暗い相貌に見据えられたとき、自分はこれから死に向かうのだなということ、それがどういう意味なのかということ、唐突に胸の上に落ちてきたんだ。それまでどうしても解けなかった幾何学の答えが、ぼろりとみつかると感じるような感じだった」

ウサギの眼をのぞいた夜を思い出した。

「深い絶望が、あの世から差し出された瞬間だった。それは同時に、凍りつくような恐怖を連れてきた。何かに罰せられている、と感じた。過去に自分がなしたよからぬ出来事が、竜巻のように足元から湧き上がって渦を巻いた」

湯気の消えたカップに、コンドウは震える唇を寄せた。

「そこに立つ男の両眼から出る闇は、まったく別の世界から漏れてくるものだった。それが、こちら側の世界との門であると気付いた。教祖といわれる、その男が門番をしていたんだよ」

ウサギの目の向こう側にある世界を、垣間見ることの恐怖に耐えられる者はいない。

「彼に救いを求めるしかなかった。言葉が届くとは思われなかったが、まだ死にたくはなかった。男の足元に縋って、少しでも死から遠ざかりたかった。彼には、その力があると思えた」

男のバランスを欠いた容姿を思い浮かべた。気管を空気が擦るしわがれ声を聞いた気がして、タカシは思わず店内を見回した。

「彼がその気になったのは、妻のおかげかもしれない。彼女が担当している月下美人の栽培は、繁殖といった方がいいかな、たぶん教団内でトップシークレットの重大事業らしいから。彼らはそれを大量に手に入れて何かをしようと企んでいる」

世界宗教にすると聞いた。

「男が私に、その力を使ったのがわかった。ふうっと、体の芯から重心が引き抜かれるのがわかった」

胸を撫でながら、コンドウは深く息を吸った。

「男がわたしに施した何らかの仕掛けが、後になって突然起動したんだ。月下美人の咲いた夜だよ。彼女と過ごした刺激的な時間が、そのスイッチを入れたのだと思う。そのエッセンスが加わったときに、はじめて反応する仕組みだったんだ。それ以来、少しずつだが

体調は回復しているようだ。どこまで続くかわからないけどね」

「奇跡は、きつと起きるわ」

隣で寄り添うアカネが、きっぱりと言った。

「わたしたちには、まだ未来があるってこと」

「そう、願いたい」

コンドウは、はにかんだ顔で頷いた。

「いつまで生きるのか、どこへ行くのか、誰にも自分ではわからな
い。それより、なんのために、誰とどうやって生きるのかを考えた
方がいい」

急速にカモンエミリへの想いを膨らませながら、タカシは言った。
父でもある教祖は、娘を救ってほしいと頼んだ。記憶をすっぱりと
失うほど傷ついたエミリを、なんとかかして癒したいと思う。

「そのとおり、タカシ君、きみ大人になったわ。旅は男を鍛えるつ
てね」

やがて、三人は屈託のないバイクの話に戻った。次のツーリングの
計画になり、必ずアカネを交えてもう一度、皆でバイク旅に出るこ
とを約束した。目の前の父娘に見えるカップルの幸せを願いながら、
タカシはその日が来ることを祈った。

アカネたちと別れて、寂しい国道を青いCBで走った。他に寄る
ところもなくアパートへ舞い戻る。部屋への階段を上がろうとした
とき、なんだかおかしな予感がそこにあった。

ドアポケットの郵便受けに、白い封筒がぴんと真っ直ぐに突き刺
さっている。素早く引き抜き、封を切るのもどかしく、中の便箋
を開いた。かいだ覚えのあるにおいが、ふわっと鼻腔をくすぐった。

それは「メサイヤ」という農業法人からの内定通知書だった。カ
モンエミリに、もう一度会うことができる唯一の片道切符でもあつ
た。タカシは拳を天に突き上げて叫びたい気分だった。

エミリにのめり込みたい、滑らかで官能的なおいのたつ裸体を
抱きしめたいと思った。疼くような欲望が、肌を火照らせ性器を固
くさせた。それは肉欲から出た、それゆえに真の愛と呼べるしろも
のかもしれない。月下美人の咲く夜に、満開の花の下、甘い不
思議なおいに包まれながら、エミリと深く抱き合いたいと願った。
誰とどうやって、いつまで生きるのか？二人の目の前に突如この
世の果てが訪れようと、何も怖くはないと思える活力が、タカシの
体の中に湧き起こっていた。それは未来を変える強靱な意志となつ
て、熱を帯びた全身の細胞を奮い立たせるのだった。

へ了へ